

國字國語改良論說年表

國語調查委員會

凡例

一本書ハ本會調査ノ進行上、國字國語ノ改良ニ對スル公私ノ施設、學者ノ所説、及ビ世論ノ傾向ヲ知ルノ必要アルヨリ、維新前後ノ奏議建策ヲ始メ、從來幾多ノ書籍新聞及ビ雜誌等ニ發表セラレタル論説ニシテ、苟モ事此ニ關係セルモノハ皆其主意ヲ摘ミ、其發表ノ歲月ヲ逐ヒテ之ヲ列記セルモノナリ。

一本書ノ稿ヲ起スヤ、數人ノ手ニ籍リテ其材料ヲ蒐集セリ、故ニ間々摘要ノ精疎ト記述ノ體裁トニ差異アルヲ免レズ。又維新以來新聞雜誌ノ浩瀚雜多ナル、殊ニ其僻遠ノ發行ニ於ケルモノニ至リテハ、耳目ノ至ラザルモノ、旁求ノ及バザルモノ、頗ル多シト爲ス。是等ハ大方ノ注意ト補正トニ頼リテ、他日大成ス。

ルノ時ヲ俟テ改定セシムトナ期ス。

一本書各事項中、發表月日ノ不明ナルモノハ、之ヲ歲月ノ末ニ記シテ其月日ヲ掲載セズ。

明治三十七年三月

國語調査委員會

國字國語改良論說年表

國語調査委員會編輯

年	月	日	事	項	掲載書目
慶應元年					
慶應二年	十二月		前嶋密、國字國文改良ノ議ヲ將軍徳川慶喜ニ上ツル。		
慶應三年					
明治元年					

國字國語改良論說年表

年	月日	事	項	掲載書目
明治二年	四月	柳河春三、布告ノ書ニ假名文ヲ用キ且板行ニスベキコトヲ建白ス。		
	五月	南部義壽、『修國語論』ヲ大學ヘ建議ス。		洋々社
	五月	前嶋密、『國文教育之儀ニ付建議』『廢漢字私見書』等ヲ集議院ニ提出ス。		
明治三年				
明治四年	八月	南部義壽、前議ヲ復ビ文部省ヘ建議ス。		
明治五年	四月	南部義壽、文字ヲ改換スル議ヲ文部省ヘ建議ス。		洋々社
	七月	文部卿大木喬任、漢字ノ數ヲ減スル意アリ田中義廉、大槻修二、久保吉人、小澤圭次郎、ニ命シテ新撰字書ヲ編輯セシム。		
明治六年		前嶋密、『學制御施行ニ先チ、國字改良相成度卑見内申書』ヲ右大臣岩倉具視ニ上ル。		

明治七年	三月	西周、『洋字ヲ以テ國語ヲ書スルノ論』ト題シ、羅馬字說ヲ主張ス。 北米ニール大學教授ホイトニ、明治五年六月書ヲ森有禮ニ送リテ同氏ノ英語ヲ以テ日本語ニ換フル意見ノ極テ不可ナルヲ切論ス。 西村茂樹、『西氏ノ說ヲ評ス』ト題シ、洋字ヲ以テ國語ヲ書スルノ不可ナルヲ論ズ。	明六雜誌第一號 Education in Japan, New York 1873.
明治八年	四月	清水卯三郎、『平假名ノ說』ト題シ、平假名ヘ國語ヲ書スルニ最モ可ナルノ說ヲ述ブ。 文部省中書記熊澤有義、同省九等出仕山田元正、同省中視學中村六三郎ノ三名、文體ヲ一定スベキ五案ヲ立テ、其何レカラ採用セラレンコトヲ建議シ、之ヲ當時召集中ノ地方官ニ諮問シテ調査ノ上上申シタリ。	明七雜誌第七號
明治九年	九月	文部省八等出仕大槻文彦、文憲寮設立ノコトヲ建議ス。 在東京小田縣士族渡邊修次郎、日本文ヲ簡便ニスベキ建議ヲ文部省ヘ提出ス。	

國字國語改良論說年表

年	月 日	事 項	掲載書目
明治十年			
明治十一年			
明治十二年	十月	學士會院會員福羽美靜ノ提出セル「學士會院ニテ日本文法書ヲ作ラントスル議」ヲ可決ス。 西周、學士會院ニ於テ福羽美靜ノ議案ヲ賛成シ、且ツ同院ニ附屬シタル日本文學社ヲ設立シ以テ國語學上ノ諸事項ヲ調査セントノ意見ヲ演ブ。	學士會院雜誌一ノ九
明治十三年	二月	學士會院文法書編纂ノ舉ヲ文部卿ニ開申スベキニ決シ、之ニ就キテ加藤弘之、文部卿ノ修正、文法ノ設定等ニ着手スルニ先チ、博言學研究ノ爲メ俊秀ヲ歐洲ニ留學セシメ、其歸朝ヲ待テ着手アランコトヲ、本院ヨリ文部卿ニ開申セントノ建議アリ。	學士會院雜誌二ノ二

明治十四年	十二月	伊藤圭介、「これもまたくちよくいふべくして、そのことはあこなはれかたきのせつ」ト題シ、漢字ヲ廢シテ假名ヲ採用センコトヲ望ミ其利便ヲ説ク。	東京學士會院雜誌三ノ十
明治十五年	四月二十五日	矢田部良吉、「羅馬字ヲ以テ日本語ヲ綴ルノ説」ト題シ、現用文字ノ困難ニシテ文運ヲ阻碍スルヲ説キ、羅馬字採用説ヲ唱ヘテ其方法ニ及ブ。	東洋學藝雜誌七、八
明治十六年	三月	池原香稱、西徳次郎、片山淳吉、吉原重俊、高崎正風、高橋新吉、那珂通世、南部義壽、内田嘉一、大槻文彦、丸山作樂、福羽美靜、近藤眞琴、有島武、宮崎蘇庵、清水卯三郎、物集高見ノ十七名「かなのとも」ヲ組織ス。	六合雜誌三ノ廿五
	七月八日	英人イービー(E. B. Y.)「羅馬字ヲ以テ日本語ヲ綴ルノ説」ト題シ、人民ノ發達ト文字トノ關係トヨリ立論シテ、其然ルベカラザル所以ヲ述ブ。	
	三月	「かなのとも」其趣意書ヲ公ニス。	
	五月	かなの會「かなのみちびき」第一の巻を發行す。	
	七月一日	いろは會、いろは文會、いつらの友、等相合同シテ「かなのくわい」ト改稱	
		西周、學士會院ニ於テ「加藤弘之博言學議案ノ議」ト云フヲ述べ、加藤弘之ノ議ニ反對ス。	全上

年	月 日	事 項	掲載書目
明治十七年	一月二十五日	東京々橋區西紺屋町十九番地萬年會ニ於テ、渡邊洪基、大槻文彦、丸山作樂、物集高見、殖田直太郎、清水卯三郎、平田東雄ノ七氏相會シ語學社(コトバノトモ)第一會ヲ開ク。爾後毎月開會第六會ニ及ブ。	東洋學藝雜誌廿九、三十、三十一
	二月	外山正一ノ『漢字ヲ廢スベシ』ト題シテ假名ノ會ノ惣寄合ニ於テナシタル演說筆記ヲ公ニス。	かなのまなび六號
	二月二十日	かなのくわい會員某、『文の書方につきて』ト題シテ言文ヲ一致セシメンコト、及ビ横列體書方ノ採用ヲセラレンコトヲ望ム。	
	四月	金田豊太郎『假名文の書方大凡の定』ト題シ、文ハ俗言及ビ耳近カキ雅言ヲ以テ記スベキコト、漢語ニテモ意義明瞭ナルハ強ヒテ和語ニ改ム可キ要ナシ、之ヲ月雪花ノ三部ニ分ツ。	
	九月	かなのくわい、『かなのまなび』第一號ヲ發行ス。	
	九月	三宅米吉、音ノ關係及ビ沿革ヲ論ズ。	
	十月	ベ、マユット、獨逸協會ニ於テ漢字ノ困難ヨリ起ル教育上ノ損失ヲ演ブ。	東京日々新聞
	十月	十月ヨリ十二月ニ涉リテかなのくわい員大槻文彦同會ノ批難ノ諸新聞紙ニ出デタルニ對シテ、十數篇ノ辯駁文ヲ草シテ投書ス。	かなのくわい大戦争一、二、三、四ノ四冊ニテ完結
	十二月二十八日	『かなのくわい大戦争』第一冊ヲ發行す。	

年	月 日	事 項	掲載書目
	四月	西村茂樹、文章論ヲ學士會院雜誌ニ出ス。	かなのみらびき十三號
	四月	三宅雄二郎、『假名軍の猛將をして一驚を喫せしむ』ト題シ、漢字ノ目ニ入リ易キ點ヲ擧ゲテ假名專用說ヲ貶シ、終ニ、己ハ羅馬字說ナルモ行フニ難ケレバ、暫ク漢字假名併合說ニ從フト説ク。	學士會院雜誌六ノ四
	五月	外山正一、『三宅氏ノ文ヲ讀ミテ百驚ヲ喫セリ』ト題シ、前論ヲ反駁ス。	東洋學藝雜誌三十一
	五月	鈴木辰海、『謹デ假名ノ會員ニ謀ル』ト題シ、漢字ヲ廢シテ片假名ヲ單用スベキコトヲ論ズ。	同上三十二、
	六月	外山正一、『漢字を廢して英語を熾に興すは今日の急務なり』ト題シ、漢字ヲ驅逐セザレバ智識擁蔽セラレテ西洋諸國ト競争スベカラズ。國字トシテ羅馬字最モ可ナレドモ養成者少ナキヲ以テ暫ク假名說ニ從フト説ク。	東洋學藝雜誌三十三
	七月一日	語學社、かなのくわいと合併シ、社名ヲ廢シテ『かなのくわい』としらべが、リ』ト改稱シ、會ヲかなのくわい事務所ニ移ス。	同上
	七月三十日	『かなのみらびき』『かなのしるべ』ト改メ其第一號ヲ發行ス。	
	八月三十日	三宅米吉、『國々の訛言につきて』ト題シ、假名ヲ專用センニハ言文一致ノ必要ナルコト、言文ヲ一致セシメントセバ國々ノ方言ヲ檢シテ標準語ヲ定ムベキコトヲ論ズ、方言調査ノ方法ヲ述ブ。	かなのしるべ二、三號
	十月十五日	神田孝平、學士會院ニ於テ『文章論(西村茂樹)ヲ讀ム』ト題シ、其改良法ノ說ヲ駁シテ言文一致論ヲ説ク。	學士會院雜誌七ノ一
	十一月四日	迂默齋、『國語ノ利害ヲ論ズ』ト題シ、思想ト言語トノ關係ヲ説キ、日本語	

年	月 日	事 項	掲載書目
明治十八年	十一月四日	ニ於ケル欠點ヲ指摘ス。 外山正一、紅葉館ニ於テ漢字排斥論及ビ排斥ノ方法ヲ演ブ。	六合雜誌四十八、
	十一月四日	元田直、紅葉館ニ於テ漢字排斥及ビ假名專用ノ方策ヲ演ブ。	
	十一月	尾關彌兵衛、大谷木備一郎、大島爲太郎等發起シテ名古屋ニかなのくわい あいち組ヲ設立ス。	
	十一月	榎本安五郎、齋藤のぼる、さかまきていたらう、等ノ諸人發起シテかなの くわい千葉組ヲ設立ス。	
	十二月二日	外山正一、羅馬字會創立會ニ於テ羅馬字會ヲ起スノ趣意ヲ演ブ。	東洋學藝雜誌三十 九、
	十二月二日	外山正一、『新躰漢字破』ヲ出版ス。	
	一月二日	平岩愷保『日本文字の論』ト題シ、神字ヲ訂正シテ十九字トナシテ曰ハク、 若シ之ヲ以テ國語ヲ寫サバ其いろは及片假字ヨリモ更ニ簡便ナルヲ以テ、 文運ニ益スルコト大ナラント説ク。	六合雜誌五〇、五 一、
	一月二十日	島野せいちらう、『假名文を三とほりにわくる論』ト題シ、日用文ハ東京 ノ中流語ヲ以テ記スベシト説ク。	かなのしるべせ、
	一月	芳賀真咲、鹿又祐藏、大石兵藏、清水廣景、重久安都男、鈴木田正雄、原 田勇美等ノ諸人發起シテかなのくわい宮城野組ヲ設立ス。	

年	月 日	事 項	掲載書目
	一月	かなのくわい岐阜組設立セラル。	
	二月	片山淳吉、『かなのけういく』ト題シ、漢字ノ害ヲ數ヘ、假名教育ノ方法ヲ 述ブ。	大日本教育會雜誌 十六、十七、
	三月	羅馬字會、羅馬字ニテ日本語ヲ書ク方法ヲ議定ス。	六合雜誌五二、
	三月十六日	高橋五郎、平岩愷保ノ説ヲ駁ス。	六合雜誌五三、
	四月三十日	平岩愷保、高橋五郎ニ答フ。	
	四月	羅馬字會、羅馬字ニテ日本語ヲ書ク方法ヲ發表ス。	
	五月二十五日	矢田部良吉、『羅馬字會書き方の理由』即チ 第一 假名ノ用井方ニ據ラズシテ發音ニ從フコト。 第二 尋常ノ教育ヲ受ケタル東京人ノ間ニ行ハル、發音ヲ以テ成ルベク 標準トスルコト。 第三 羅馬字ヲ用キルニハ其子字ハ英吉利語ニテ通常用キル音ヲ取り其 母字ハ伊太利亞語ノ音(即チ獨逸語又ハ拉丁語ノ音)ヲ採用スルコ ト。 ノ説明ヲ示ス。	東洋學藝雜誌四十 四、
	六月十日	羅馬字會、羅馬字雜誌第一號ヲ發行ス。	羅馬字雜誌一號
	六月十日	島田三郎『羅馬字の便利』ト題シ、大ニ活版植字ノ手間ヲ省クコトヲ説ケリ。	
	七月一日	『かなのしるべ』ヲ『あ』かなのしんぶん』ト改メテ第一號ヲ發行ス。	
	七月十日	三宅雄二郎『文字の争』ト題シ、英語ノ廣ク歐洲ニ行ハル、ハ、シエロク スピヤ、ペーコン、ロック、ニョートン等諸文豪ノ出デタリシガ爲ナリ。	

年	月 日	事 項	掲載書目
明治十九年	七月十日	羅馬字ヲ廣ク行ハシメントセバ該文字ニテ大詩文ヲ草セザル可ラズ。大詩文ヲ作り出デントセバ大ニ之ガ練習ヲ爲サソル可ラズト説ク。 鈴木唯一、『手紙の書方』ト題シ、難字難語ヲ用ル可ラズト説ク。 かなのくわいかさかたかいりやうぶ、『かなのざつし』第一號ヲ發行ス。	羅馬字雜誌二號
	七月	高田早苗、横濱攻學會ニ於テ英語ヲ以テ、日本ノ邦語ト爲ス可キノ説ヲ述ブ。大要ハ世界各國ノ言語ヲシテ一ニ歸セシムルノ目的ヲ以テ、先ツ我邦語ヲ變シテ英語ト爲ス可シト云フニ在リ。	中央雜誌十號
	八月九日	ニフ、シロタ、教育會常集會ニ於テ『日本國語論』ト題シ、漢語ヲ排斥シ洋語ヲ採用シテ國語ノ語彙ヲ豊富ニシ、教科書ヲ一様ニスベシト演ブ。	大日本教育會雜誌二十六號
	八月	田中館愛橘、羅馬字意見ヲ述ブ。	理學協會雜誌十六號
	十月十日	松井直吉、『文字の歴史』ト題シ、文字ノ歴史ヲ畧叙シ漢字ヲ排斥シテ羅馬字ニ改メザル可ラズト説ク。	羅馬字雜誌五、六、七號
	十一月二十日	み、よ、『俗語をいやしむな』ト題シ、俗語ヲ以テ文章ヲ草スベシト説ク。	かなのざつし三、四、五號
	一月十日	矢田部良吉、文字ハ知識ヲ得ル道具タルニ過ギザレバ、文字ヲ學ブニノミカヲ勞スルハ愚ナレバ、一日モ速ニ漢字ヲ驅逐セザル可ラズト説ク。	羅馬字雜誌八號
	一月二十三日	羅馬字會第一總集會席上ニ於テ、井上馨、文字ノ綴リ方ヲ論ズルニ先チテ、	

二月二十五日	文法書ヲ編纂スベシト述ベ、英國公使フランケット(Plunkett)ハ羅馬字ノ便利ナルコト及ビ其施行方法ヲ演ブ。 矢田部良吉、『教育家の一讀を煩はす』ト題シ、西洋流ノ開化ヲ輸入スベシト決定シタル上ハ、羅馬字ヲ用ルコトニ着手セザル可カラザルコトヲ論ズ。	東洋學藝雜誌五十三、
三月	矢野文雄、『日本文體文字新論』ヲ出版ス。	
三月	物集高見、『言文一致』ヲ出版ス。	
四月十日	ランペ、ベリオリ(L'Abbe Berlioz)『羅馬字の便利』ト題シ、『函館羅馬字傳習會ニ於テ爲シタル演說筆記』ヲ載ス。	羅馬字雜誌十一號
四月十日	大森唯中、教育會總集會ニテ『文章ノ變遷』ト題シ、教育ト言語文字トノ關係ヨリ説キ起シ和漢文章ノ變遷ヲ略叙シ、外國語ノ傳來ニヨリテ固有ノ言語文章ノ廢頽スル所以ヲ説キ、當今文章ノ晦澁ニシテ教育ニ害アルヲ歎ズ。	
五月十日	羅馬字新誌社、羅馬字新誌第一號ヲ發行ス。	
五月十日	羅馬字新誌第一號ニ於テ、其羅馬字用法ヲ發表ス。	
五月二十五日	氏家鹿三郎、矢田部良吉ノ『教育家の一讀を煩はす』ニ對シテ反駁シ、外面忠臣内心賣國ノ士ト罵ル。	東洋學藝雜誌五十六
六月十日	北川乙次郎、『吾々の選びたる文字に如何なる名を與へんか』ト題シ、廿六字ノ讀方ニ就キテ意見ヲ述ブ。	羅馬字新誌二、三號
七月十日	天海謙、『羅馬字會の爲に辯ず』ト題シ、ガベレンツノ羅馬字書キ方ハ日本語學上ノ法則ヲ破壞スルモノナリトノ説ヲ駁ス。	羅馬字雜誌十四號

年	月 日	事 項	掲載書目
	七月十五日	『いかなしんぶん』かなのてかがみ』と改題シ、其第一號ヲ發行ス。	
	八月十日	アール、アラン(R. Allain)羅馬字使用法ノ意見ヲ羅馬字雜誌ニ寄ス。 Nagase Akira、羅馬字ノ普及ニツキテ説ク所アリ。	羅馬字雜誌十五號
	八月十五日	高橋新吉、『文字改正の問題』ト題シ、文字ノ起原ヨリ立論シ、和字ト漢字、及ビ和字ト洋字トノ優劣ヲ論シ、日本語ヲ寫スニハ日本固有文字ヲ最モ適當トナスト述べ、其書方及ビ文法ノ事等ニ及ブ。	同
	八月三十一日	植村正久、『羅馬字會と假名の會』ト題シ、日本將來ノ文字ハ羅馬字ナラザル可ラザル所以、及ビ羅馬字派ノ振ハザル理由ヲ論ズ。	かなのてかがみ 二、三號
	九月十日	青木セイジロー、羅馬字畧號ニツキテ意見ヲ述ブ。	六合雜誌六十八、 羅馬字雜誌十六號
	九月	帝國大學ニ博言學科ヲ置ク。	羅馬字新誌六、七、 八號
	十月十日	實吉益美、發音ニ依ツテ言葉ノ綴字ヲ畧スベキ説ヲ述ブ。	かなのてかがみ四 號
	十月十五日	松尾ながゆき、『支那人も漢字の多きを苦んで假名を用ふ』ト題シ、其例ヲ示シ之ニ因ルモ漢字ハ早晚廢セラレベキモノナリト論ズ。	
	十月三十日	羅馬字會ノ書方及ビ其態度前途等ニツキ、記者ト米國博士フルベッキトノ問答ヲ掲グ。	六合雜誌七〇、 學士會院雜誌九ノ
	十一月十四日	川田剛、學士會院ニ於テ『日本普通文字ハ將來如何ニナリ行クカ』ト題シ、發音言語ノ變ゼサル限リハ、政府ノ威力ト學者ノ筆舌トヲ以テ俄ニ文字ヲ改革スベキニアラズト斷ズ。	

年	月 日	事 項	掲載書目
明治二十年	十一月	末松謙澄、日本文章論ヲ著ハス。	
	十二月十日	草野紋平、『羅馬字をめぐりて世に行はするにつき意見』ト題シ、其方法ヲ述ブ。	羅馬字雜誌十七號
	十二月十五日	岐阜學藝同好會雜誌ニ於テ、國語ニテ寫サレタル文章ノ發達セザリシハ、假名文ノ世用ヲ爲サベリシガ故ナリトテ假名專用説ヲ述ブルモノアリ。	岐阜學藝同好會雜 誌
	十二月十五日	田中義重、Mimura Isaburo 等發起シテ茨城縣谷田部町ニ羅馬字研究會ヲ設立ス。	
	一月十日	Sumi Katsusaburo『羅馬字に兼ね用ゐる漢語の制限法を望む』ト題シ、漢語ヲ廢セスンバ羅馬字ヲ國字トナサンコト終ニ難カラント説ク。	羅馬字雜誌廿號
	一月	高橋五郎、『古今將來日本語並文字論』ト題シ、支那ノ言語文字ノ日本文學ニ及ボセル歴史ヲ畧叙シ、羅馬字説ヲ贊シテ羅馬字會規則ノ缺點ヲ摘出ス。	六合雜誌七三、七 五
	二月十日	Shiraki Kinzo『羅馬字の擴張を望む』ト題シ、羅馬字ト假名トノ利便ヲ比較シ漢字ノ害ヲ述べ、音符文字殊ニ羅馬字ヲ採用スベキヲ論ズ。	羅馬字雜誌廿一、 廿二號
	二月二十日	『Imoya Kuruu』『やまと言葉の綴り方』ト題シ、言葉ニハ各特性アルヲ以テ其性質ニ基キテ綴ラザル可ラズトテ、氏ノ所謂もちまへノ大畧ヲ掲ゲテ論ズ。	羅馬字新誌十號
	三月十九日	羅馬字會第二總會席上ニ於テ、榎本武揚、羅馬字ノ便及ビ其普及方案ヲ説キ、米國公使ハバード(R. B. Hubbard)新知識ノ輸入發達ト共ニ文字ノ改良	

年	月 日	事 項	掲載書目
	四月二十三日	澁谷信次郎、茨城縣谷田部町羅馬字會總會ニ於テ、『假名と羅馬字との比較』ト題シ、羅馬字ノ音ヲ寫スコト假名ヨリモ精細ナル由ヲ演ブ。	學士會院雜誌九ノ四
	五月 八日	中村正直、學士會院ニ於テ『漢學不可廢論』ヲ演ブ。	
	五月二十五日	『F』語尾の變化は明かなるべし』ト題シ、羅馬字書方ヲ用カンニモ歴史的ノ假名遣ニ注意スベシト説ク。	羅馬字新誌十一號
	六月十五日	村尾愷太郎、『かなの利用は教育の經濟』ト題シ、其利用ノ點ヲ指示ス。	かなのてがみ十七號
	六月二十五日	『Irimoya Kururu』話と書き物との違』ト題シ、チャムバレーンノ説ヲ駁シテ何國ニテモ口語ト文章トノ異ナル例ヲ示シ、此兩者ノ相違ハ開化ノ生ミ出セル所ナリト説キ、其相違點ヲ列擧シ文章語ハ學問ニ關スル事項ヲ記スニ適シ、口語ハ俗事ヲ寫スニ適スト述ブ。	羅馬字新誌十二、十五、十六、廿四、
	八月十五日	矢野文雄、『日本の假名と羅馬字との論』ト題シ、假名ハ羅馬字ヨリモ便ナリト説ク。	同上
	八月十五日	物集高見、かなのてがみニ於テ、文章ハ必ず話ノ如ク書ク可キ理由ヲ論	

	八月二十五日	シ、矢野文雄氏ハ、日本ノ假名ハ日本ノ字トシテハ羅馬字ニ勝リ、羅馬字ハ歐洲ノ文字トシテハ假名ニ優ルト説ケリ。	かなのてがみ十四、
	八月二十五日	肥塚龍、『日本に第二の日本語を作るべし』ト題シ、世界ニ雄飛セント欲セバ、英語又ハ佛語ヲ採用シ、之ヲ第二ノ國語トナスベシト論ズ。	學海之指針二、三、
	八月二十五日	辰巳小次郎、『駁言文一致論』ト題シ、羅馬字雜誌所載ノチャムバレーンノ言文一致説ヲ駁ス。	學海之指針二、三、
	八月 七日	大阪いろは組ヨリ『はやくかなのしんぶん』第一號ヲ發行ス。	四號
	九月十五日	物集高見、文章ヲ寫スニ口語ノマ、ナラシメバ全國語一定シ、且言語麗雅ナルニ至ラント説ク。	かなのてがみ十五號
	九月二十五日	北尾次郎、『颯風の說』ト題シ、其序論ニ於テ漢語ノ害ヲ述べ、適宜ノ文字ヲ作リテ日本語ヲ獨立セシムベシト説ク。	學海之指針三號
	十月 十日	イービー(C. S. Eby)大日本教育會ニ於テ『日本教育の進否は日本語の發達如何にあり』ト題シ、一國ヲ發達セシメントセバ普通教育ヲ盛ニセザル可ラザルコト、普通教育ノ起點ハ日本語ナラザル可ラザルコト、日本語ヲ發達セシメントセバ羅馬字ヲ採用セザル可ラザル所以ヲ論ズ。	大日本教育會雜誌六十四、六十八號、羅馬字雜誌卅二、卅三、卅四、卅五
	十一月十五日	ふ、み、假名學校ヲ起スベシト檄ス。	かなのてがみ十七號
	十二月一日	假名學校ヲ九段坂下玉章堂ニ開ク。	
	十二月十日	手島精一、『教育上羅馬字の得失』ト題シ、西洋兒童ノ例ヲ引キテ、兒童知識ノ發達上必ず羅馬字ヲ採用セザル可ラザル所以ヲ説ク。	羅馬字雜誌卅六號
	十二月二十五日	『F』國家ト國語トノ關係ヲ説キ、外國語ヲ以テ國語ト爲ントノ説ヲ駁ス。	羅馬字新誌十五、十七號

年	月 日	事 項	掲載書目
明治二十一年	一月十五日	平井正俊、『文字の論』ト題シ、文字の職掌ヨリ論テ、漢字ヲ排斥シ假名説ヲ賛シテ言文一致説ニ及ブ。	かなのてかがみ十九號
	一月	かなのくわい横濱組ヨリ「かなのみなと」第一號ヲ發行ス。	かなのてかがみ廿九號
	二月十五日	かなのくわい『假名文書キ方』ヲ發表ス。	かなのてかがみ廿九號
	三月十一日	西村茂樹、學士會院ニ於テ『日本の文學』ト題シ、文字ノ條ニ於テ漢字ノ棄ツ可ラザル所以ヲ演ブ。	學士會院雜誌十ノ二
	四月十四日	羅馬字會第三總集會席上ニ於テ、三好退藏ハ、漢字排斥演説ヲナシ、英人イロー(C. S. Eby)ハ、漢字假名羅馬字ニ就キテ評論シ羅馬字採用説ニ賛成スト演ブ。	
	四月十五日	かなのてかがみニテ某『西村茂樹の日本之文字』ト題セル演説ヲ駁論ス。	かなのてかがみ廿二號
	四月	末松謙澄、かなのくわい大會ノ席上ニ於テ人名地名ヲ漢字ニ記スル害等ヲ擧ケテ、結局日本ニ一種ノ詞ヲ造リ、言文一致ノ書物ヲ拵ヘテコノ國ノ文學ヲ確定シ、文字ト國トノ關係ヲ眞實ナラシメンコトヲ希望スルヨシヲ演ブ。	かなのてかがみ二十三號
	四月	大槻文彦(かなのやのあるじ)『てがみのかさかた』一ノツ、リヲ出ス。	
	四月	宮地巖夫、福西四郎左衛門、黒田太久馬等、言語取調所ノ創立ヲ計畫ス。	言語第一號

	五月二十五日	『H. N.』羅馬字にて日本人の名の書き方』ト題シ、世人ノ万般西洋ヲ崇拜シテ之ニ摸スルヲ難シ、姓名ノ順序ハ日本流ニ爲スベシト説ク。	羅馬字新語廿號
	五月	『文』社説ニ於テ、口語ノ練習ヲ獎勵シ、此練習成ラバ言文ノ一致自ラ成ラント説ク。	文一ノ十號
	六月一日	かなのくわいみうらくみヨリ『あまがさひづり』第一號ヲ出版ス。	
	六月十五日	平井正俊、『日本の文法』ト題シ、文ハ話ノ寫眞ナラザル可ラズト説キ、文法ノ改良ニ及ブ。	かなのてかがみ廿四號
	六月二十二日	羅馬字會第四總集會ニ於テ、佛國公使ア、シエンキキツチ(A. Stankiw)ハ、歐米諸國トノ交際ヲ親厚ニセントセバ多少ノ困難アリトモ羅馬字ヲ採用セザル可ラズト演ベ、末松謙澄ハ、初困難ナルガ如キハ總テ慣レザルガ故ナリト説キテ羅馬字ノ練習ヲス、メ、プリンクリー(F. Binkley)ハ、羅馬字ヲ採用シテ教育上ノ困難ヲ除去スベシト述べ、増島六一郎ハ、羅馬字ヲ採用セバ西洋ノ文物ヲ輸入スルニ便ナリト陳テ、前島密ハ漢字ヲ普通文ヨリ驅除スベシト論ズ。	
	九月九日	西村茂樹、學士會院ニ於テ『日本の文學再續』ト題シ、言文一致ハ文學上ニ效テントト論ズ。	學士會院雜誌十ノ十
	九月十日	Konai Tomonobu『假名の説』ト題シ羅馬字トノ比較評論ヲ試ム。	羅馬字雜誌四十、四十一號
	十月十三日	伊澤修二、大日本教育會ニ於テ『本邦語學ニ付キテノ意見』ト題シ、其意見ヲ述べ、引續キ兩三回ニ及ブ。	大日本教育會雜誌八十一、八十二、八十五
	十月	言語取調所、高崎五六ヲ副會長ニ推選シ、別ニ評議員幹事等ノ役員ヲ置ク。	言語第一號

年	月 日	事 項	掲載書目
明治二十二年	十一月十日	松村任三、『學術上の書物は羅馬字を以て書くべし』ト題シ、其便益ヲ説ク。	羅馬字雜誌四十二號
	十二月二十日	言語取調所創立會ヲ芝公園彌生社ニ開キ、副會長高崎五六、首唱者黒田太 久馬出演ス。	言語第一號
	一月	有賀長雄、『日本教育に於ける漢字の地位』ト題シ、事實上、法式上、藝能 上ノ三方面ヨリ論ヲテ、漢學ノ棄ツ可ラザル所以ヲ述ブ。	文二ノ一號
	三月	兒島猷吉郎、文章論ヲ稿シテ言文一致論者ヲ難ズ。	文二ノ六號
	三月	吉見經綸、『文に就て』ト題シ、言文一致論者ハ利便ヲノミ説キテ、文ノ情 感ヲ充發スベキ要具タルヲ忘ルト説ク。	文二ノ六號
	四月一日	落合直澄、『普通語に就きて』ト題シ、普通語ノ言文一致ヲ唱道ス。	皇典講究所講演四
	四月	山田武太郎(美妙)、『言文一致小言』ト題シ、吉見經綸ノ所説ヲ駁ス。瓢箪 生『兒島先生ト吉見先生』ト題シテ、ソノ説ヲ駁ス。兒島猷吉郎、『再ビ文 章ヲ論ヲテ山田美妙ニ示ス。	文二ノ七號同二ノ 八號
	四月	官報局送假名法ヲ制定シ、官報號外トシテ出版ス。爾後官報ノ送假名ハ凡 テ此ノ法ニ依ル。	官報
	五月	山田武太郎、『言文一致論ニ就テノ兒島猷吉郎ノ駁撃ニ答フ。	文二ノ九號
	五月	兒島猷吉郎、『再ビ文章を論ズ』ト題シ、言文一致論者ニハ美ノ觀念ナシト	

年	月 日	事 項	掲載書目
明治二十二年	五月	説ク。	文二ノ九號
	五月	松本胤恭、『明治文學ノ二大疑問』ト題シ、漢字ト歐字及ビ假名トハ發達ノ 性質ヲ異ニスルヲ以テ、字數ノ多寡ノミヲ以テ直ニ學修ノ勞逸ヲ説クベカ ラズト論ズ。	文二ノ九、十號
	五月	山田武太郎、兒島猷吉郎ノ『再ビ文章ヲ論ズ』ト題シテ述ベタル諸説ヲ駁ス。	文二ノ十號
	五月	兒島猷吉郎、『言文一致ヲ論ヲテ山田武太郎ノ駁論ニ答フ。	文二ノ十號
	五月	駒井親房、『言文一致論に付て』ト題シ、事物ハ必要ニ應テ起ル。言文ノ 二途ニ別レタルハ發達セル人智ノ要求ニヨレルモノナリト説ク。	文二ノ十號
	五月	山田武太郎、『言文一致或問』ト題シテ世難ニ答フ。	文二ノ十號
	五月	藤山豊、『文章論について兒島君及美妙君に告ぐ』ト題シ、兒島氏ハ文章ヲ 以テ美術トナスガ故ニ兩君ノ論旨ハ互ニ齟齬セルモノナリト説ク。	文二ノ十號
	五月	獨逸人モッセ、かなの會大集會ニ於テ、通俗ノ文章ヲ發達スベク、且ツ日 本固有ノ假名ヲ維持スルハ國民ノ義務ナル由ヲ述ブ。	かなのでかがみ三 十六、
	五月	平田東雄、『かなのでかがみ』ニ於テ、『普ク全國ノ有志者ニ告グ』ト題シ、假 名ノ貴重スベキ所以ヲ論ズ。	かなのでかがみ三 十五、
	六月八日	探深主人ハ『言文一致に付て』ト題シテ、已往ノ文學ヲ壞ハシ、將來ノ文學 ヲ發達サセ得ル限リハ、カヲ極メテ言文二者ヲ親密ナラシムルヲ上乘トス ルヲ論ズ。	東洋學藝雜誌三ノ 五、
六月八日	上田萬年、大日本教育會ニ於テ、『言語上ノ變化ヲ論ヲテ國語教授ノ事ニ及 ブ』ト云フ演説ヲナス。	大日本教育會雜誌 八十八、八十九、	

年	月 日	事 項	掲載書目
明治二十三年	六月	碧海老人、『言文論』ト題シ、學者ニハ學者ノ通用アリ、俗人ニハ俗人ノ通用アリ、文體ハ其程々ニ從フ可キモノニシテ一概ニハ決シ難シト説ク。	文二ノ十一號
	六月	山田武太郎、『兒島献吉郎及其他ノ非言文一致論者諸氏へ』ト題シ、言文一致ノ意義、其條件、及ビ基礎語等ニツキテ一言シ、兒島献吉郎ノ説ヲ駁ス。	文二ノ十一、十二號
	六月	駒井親房、『讀言文一致或問』ト題シテ前説ヲ駁ス。	文二ノ十一號
	六月	西師意、『言文一致論』ト題シ、言文ヲ一致セシムルハ最大急務ナリトテ其一致方策ヲ述ブ。	文二ノ十二號
	六月	姉崎正治、『言文一致論に付てに付て』ト題シテ駒井親房ノ説ヲ駁ス。	文二ノ十二號
	七月二十五日	平田東雄、『あまねく全國の有志者に告ぐ』ト題シ、漢字ノ不便羅馬字ノ行ハレ難キ所以ヲ説キ假名專用説ヲ述ブ。	かなのてかがみ 卅七、卅八號
	十月	大日本教育會總集會ノ討論會ニ於テ、小學ノ教科ニ國語ノ一科ヲ設クルノ議ヲ提出ス。	
		久米幹文、上田萬年、三上參次、等都下ノ學校學會等ヨリ教師或ハ幹事ヲ皇典講究所ニ集メ、國文學教授法ノ一定及ヒ斯學ノ振興ヲ計ル。	
	一月	神保小虎、かなの會ニテ北海道地名ヲ漢字ヲ以テ記スルノ害ヲ論ズ。	かなのてかがみ 十四
	四月	箕作佳吉、『國語改良の手始』ト題シ、文ハ人ニ讀ミ聞セテ分ル様ニ書キ物	

年	月 日	事 項	掲載書目
明治二十四年	五月一日	ノ名ハ耳ニ聞ケバ解ル様ニ附クベキ由ヲ述ブ。	東洋學藝雜誌
	五月	加藤弘之、『國語傳習所ニ於テ日本語學の事につきて』ト題シテ、我國語ノ特性ヲ述ベテ國語ヲ改良スベキ事ニ及ブ。	東洋學會雜誌四ノ五
	五月	言語取調所ヨリ『言語』第一號ヲ發行ス。	言語第一號
	六月二十五日	坪井九馬三、『もろこし文字を一日も早く我普通文より廢さ出さるべからず』ト題シテ、漢字ノ排斥ヲ論ズ。	
	六月二十五日	芳賀矢一、『國語攻究上羅馬字の要用を論ず』ト題シ、假名ノ日常ニ於ケル不便ハ猶ホ忍ブベキモ國語攻究上ノ難事ハ堪フベカラズト論ズ。	國文學一ノ二十
	八月	神田乃武、言語ト文字トノ話ヲ掲グ。	東洋學藝雜誌百七號
	十月二十三日	言語取調所、言語取調上ニ關スル物品等ヲ帝國大學ニ寄贈ス。	
	一月十日	井上哲次郎、羅馬字ヲ採用セザル可ラザル所以ヲ説ク。	羅馬字雜誌六十
	一月	井上圓了、『漢字論』ト題シ、漢字組織法ヲ説キ、此組織ニ基キテ教フレバ學習上記憶上ニ便ナラント説ク。	羅馬字雜誌六十八號、六十九號
	二月二十五日	坪井九馬三、『漢字を一日も早く我普通文より廢さ出さるべからず』ト題シ、漢字保存論者ノ論旨十一項ヲ擧ゲテ一々之ヲ論難ス。	天則三ノ七、
三月十五日	かなのてかがみ社説欄ニ於テ、『ヒラカナトカタカナト』ト題シ、各長所ヲ擧ゲ平假名ハ筆書ニ用キ、片假名ハ印刷ニ用キルベシト説ク。	かなのてかがみ 五十七號	
四月	佐藤寛、皇典講究所講演誌上ニ『日本語擴張の方案』ヲ掲グ。	皇典講究所講演五	

年	月 日	事 項	掲載書目
明治二十五年	八月十日	天國浪人、『羅馬字に關する意見』ト題シ、漢字假名羅馬字ヲ比較シテ羅馬字採用説ヲ唱ヘ其普及方法ヲ述ブ。	羅馬字雜誌八十七號
明治二十六年	三月	佐藤寛、皇典講究所講演誌上ニ『國語一定ノ二大方案』ヲ掲ゲテ國語典故語典ヲ編撰シ、之ヲ全國ノ小學校ノ課定ニオカントヲ述ブ。	皇典講究所講演九、一〇一、
	七月二十五日	細川潤次郎、國語講習會 <small>(第一高等中學校)</small> ニ於テ『國語講習會に於て所見を述べ』ト題シ、國語ノ存亡ハ國ノ存亡ト關係スルモノナレバ國語ノ發達ヲ謀ラザルベカラズト演ブ。	
	八月六日	文部大臣井上毅、國語教員ノ夏期講習會ニ臨ミ國文ヲ發達セシメントスルニハ國文ノ組織ヲ經トシ、漢文漢字ノ材料ヲ緯ニセンコトヲ主義トセザルベカラズト説ク。	
		同會ニ於テ小中村清矩、徳川ノ世ノ平易ナル漢字交リ文ニ、神皇正統記、	

年	月 日	事 項	掲載書目
明治二十七年	四月	井上哲次郎、大學通俗講演會ニ於テ『文字と教育の關係』ト題シ、文字ノ難易ニヨリテ知識ノ發達ニ遲速アルコト、假字説ヲ探ルコトヲ演ベ、猶文字改良創作ニ關スル外國ノ類例ヲ舉グ。	日本新聞一七一號 東洋學藝雜誌 二、五一、一五 二、一三、八五
	四月十二日	山陽ノ一書生(井上通泰)、日本新聞紙上ニ『井上哲次郎氏に誨ふ』ト云フ文ヲ掲ゲ、曩ニ井上哲次郎ガ『文字と教育の關係』ト題シ演述シタル中ニ、『書法ハ横書ヲ可トス何トナレバ眼目自然ノ形狀ニ適スレバナリ』トアル一節ニ付キ異見ヲ述ベ、横書(横讀)縦書(縦讀)ノ可否ヲ決センニハ、必ズ『眼筋ノ上下移力ト内外移力トヲ比較セザル可カラズ』ト論ズ。	日本新聞一七二號
	六月十七日	伊澤修二、大日本教育會第十一回總集會席上ニ於テ、『加藤文學博士ノ小學教育改良論ヲ駁ス』ト云フ演説ヲナス。	大日本教育會雜誌 百五十二
	九月	太平記、盛衰記ノ類ノ古文ヲ折衷シテ普通文ノ模範トナスベシト演ブ。	皇典講究所講演一
	九月	目黒和三郎、皇典講究所講演誌上ニ『語格一定ノ方案ノ出デントヲ望ム』ト云フ論文ヲ掲グ。	皇典講究所講演一
	十月	福地源一郎、『明治今日の文章』ト題シ、漢語ノ跋扈ヲ歎シ其由テ來ル所以ヲ説キ、一國ノ言語ハ其國獨立ノ上ニ必要ナレバ、速カニ實用文章ヨリ此妖魔ヲ驅逐シテ國語ノ勢力ヲ復セザル可ラズト説ク。	國民の友十三ノ二 百四、二百八、
		加藤弘之、『小學教育改良論』ヲ演シ、其ノ中ニ漢字ヲ用フルヨリ生ズル困難及其排除ノ方案ヲ論ズ。	

年	月 日	事 項	掲載書目
明治二十八年	六月	西村貞、加藤博士ノ『小學教育改良論』ヲ讀ミテ一片ノ冀望ヲ同博士ニ呈ス』ト云フ論說ヲ大日本教育會雜誌ニ掲グ。	大日本教育會雜誌 百四十八
	十一月	篠田利英、『國學者の普通教育上に負へる務』ト題シ、其必要ヲ説ク。	國學院雜誌一、
	十一月	落合直文、『戦争と國文學』ト題シ、漢字減少論ヲ説ク。	國學院雜誌一、
	十二月	上田萬年、『歐洲諸國に於ける綴字改良論』ヲ出ス。	太陽一ノ七、
	一月五日	三宅雄二郎、『漢字の利害』ト題シ、漢字ノ廢スベカラザル所以ヲ述ベ、漢字ノ用ヲ擴ムル一着歩トシテ字音ノ理ヲ明ニスベシト説ク。	太陽一ノ一、
	一月十二日	上田萬年、大日本教育會ノ講談會ニ於テ『教育上國語學者ノ拋棄シ居ル一 大要點』ト云フ演說ヲナシ、學者ノ反省ヲ促ス。	大日本教育會雜誌 百六十三
	一月	上田萬年、『標準語に就きて』ト題シ、標準語ノ性質ヲ説キテ我國ニ於テ速 ニ之ヲ確定スベキト及ビ其方法ノ大要ニ及ブ。	帝國文學一ノ一、
	二月	物集高見、『落合君にむくゆ』ト題シ、名詞ノ外ハ悉ク假名ニナスベシト説 ク。	國學院雜誌四、
	三月五日	三宅雄二郎、『國字を論ず』ト題シ、假名雜馬字諺文等ニツキテ論ヲ到底何 レモ行ハレ難カラント述ブ。	太陽一ノ五、
	四月二十日	三宅雄二郎、『漢字ノ利導說』ト題シ、漢字廢止ハ損多クシテ益少ナケレバ	

四月二十五日	之ヲ廢セントスルヨリハ寧ロ之ヲ利導スルニ如カズト説ク。 早稻田文學記者(坪内雄藏)、『新文壇の二大問題』ト題シ、新國文法論、新國 字論ヲ述ブ。	太陽一ノ八、
四月二十五日	關根正直、『早稻田文學ニ』語法私見』ト題シ、語法上種々ノ改正ヲ斷行スル 意見ヲ發表シ社會ノ批評ヲ求ム。	早稻田文學八六、
四月	岸上操(質軒)、太陽ニ『語法私見を讀む』ト題シ、關根正直ノ說ヲ批評ス。	早稻田文學八六、 八七、
五月十日	早稻田文學記者(坪内雄藏)、『新國字論に就きて』ト題シ、諸學者ノ新國字 論ヲ批評ス。	太陽一ノ六、
五月十日	阪正臣、『早稻田文學ニ』語法私見を讀みて』ト題シ、關根正直ノ說ニ同意ス ル由ヲ述ブ。	早稻田文學八七、
五月二十五日	上田萬年、大學通俗講談會ニ於テ『新國字論』ヲ演ブ。	早稻田文學八七、
五月二十五日	木村鷹太郎、『日本文字改良案』ヲ掲ゲ片假名ヲ改良シテ用キンコトヲ説ク。	教育時論
五月二十五日	と、早稻田文學ニ『語法私見を讀みて』ト題シ、關根正直ノ所說ニ對シ異 見ヲ述ブ。	早稻田文學八八、
五月二十五日	關根正直、『早稻田文學ニ』係り結びの規則に就いて』ト題シ、係結ノ規則ハ修 辭上ノ論ニシテ普通ノ國語學上ニハ其ノ沙汰ナクトモ不便ナキ由ヲ述ブ。	早稻田文學八八、
五月	國學院雜誌ニ雜報子ノ『新語法短評』ヲ掲グ。	國學院雜誌第八號
六月十日	關根正直、『早稻田文學ニ』語法私見に就いて、と、氏に答ふ』ト題シ、其 異見ニ答辯ス。	早稻田文學八九、
六月十一日	天田記者、ソノ社說ニ於テ『國字新製考』ト題シ、國字新製ノ要及ビ其事ニ	

年	月 日	事 項	掲載書目
	六月二十五日	上田萬年、『早稲田文學』ニ『語法私見のをはりに書す』ト題シ、關根正直ノ説ニ同意ス。	天則八ノ六、 早稲田文學九〇、 東洋學藝雜誌二六 五號二七九號
	六月	元良勇次郎、横讀縦讀ノ利害ニ就テ其説ヲ發表ス。	
	六月	岡倉由三郎、『新國字論』ト題シ、非國字改良説ヲ駁シ新國字ノ具フべき要件ヲ擧グ、之ニヨリテ假名ローマ字等ヲ試驗シ、ローマ字ハ最良ナルモノナレトモ感情上ノ衝突アリテ實行ニ難シ等ニ就キテ詳論ス。	帝國文學一ノ六一 一ノ八、 帝國文學一ノ七、
	七月十日	佐藤夢吉、帝國文學ニ『關根氏ノ語法私見ニ就キテ』ト云フ論文ヲ出ス。	
	七月十日	縱横生、早稲田文學ニ『關根氏の文法論を讀みて』ト題シ、關根正直ノ所説ニ付キ所見ヲ述ブ。	早稲田文學七一、
	九月十日	寺町愛山、早稲田文學ニ『關根正直氏の新語法論を讀みて異見を質す』ト題シ、關根正直ノ語法私見ニ異見ヲ述ブ。	早稲田文學九五、 九六、
	九月	中村秋香、『雅言俗言』ト題シ、古代ノ例ヲ引キテ口語中雅ナルモノヲ撰ビテ、歌文ヲ綴ラザルベカラズト論ズ。	國學院雜誌十一、
	十月十日	關根正直、早稲田文學ニ『語法論に就きて寺町氏に』ト題シ、寺町愛山ニ答辯ス。	早稲田文學九七、
	十月	高津鐵三郎、早稲田文學ニ『關根氏の語法私見を讀みて』ト題シ、關根正直ノ所説ニ付キテ其所見ヲ述ブ。	早稲田文學九七、

年	月 日	事 項	掲載書目
明治二十九年	十月 二十四日	元良勇次郎、『再び縦讀横讀問題に就て』ト云フ論文ヲ日本新聞紙上ニ掲グ。	
	十月	岡田正美、『漢字全廢を論じて國文國語國字の將來に及ぶ』ト題シ、平假名ノ便ナルコトヲ種々ナル場合ニ徴シテ詳論ス。	帝國文學一ノ十、 一ノ十二、 國學院雜誌十二、
	十月	湯本武比古、『國語教授の研究所』ト題シ、生活アル國語ノ教授ヲ勸奨ス。	
	十一月二日	山口銳之助、大日本教育會講演會ニ於テ『日本文の書き方及び字典につき』ト題シ、其改良ヲ要スルコトヲ述ブ。	大日本教育會雜誌 百七十三號
	十一月十九日	山陽ノ一書生(井上通泰)、『再び縦讀横讀問題に就てを評す』ト云フ論文ヲ日本新聞紙上ニ掲グ。	
	十一月二十五日	寺町愛山、早稲田文學ニ『關根氏が語法論の答辯を讀みて再質す』ト題シ、再ビ關根正直ガ語法私見ニ付キ異見ヲ述ブ。	早稲田文學一〇
	十二月三十一日	菅沼岩藏、『文字文章改良論』ヲ出版ス。	高等國文第一
		平田盛胤、『語法私見を讀みて』ト題シ關根正直ノ説ニツキ所見ヲ述ブ	國學七、八、九
		三矢重松、『明治の國文を論ず』ト云フ論文ヲ出ス	青年文第五號
		青年文記者『新語法論』ヲ出ス	
	二月	峯原平一郎、『岡田正美の漢字全廢を論じて云々の説をよみて』ト題シテ其説ヲ批評シ其所謂自然假名遣ヲ駁ス。	國學院雜誌二ノ 四、
	四月	岡田正美、『分別書方論』ヲ掲グ。	國學院雜誌二ノ 六、
	四月	藤岡勝二、『言語學上文字の價值』ト題シ、文字ノ性質ヲ論ジテ羅馬字採用	

年	月 日	事 項	掲載書目
明治三十年	五月	岡田正美、『自然假字遣法』ト題シ、峯原平一郎ノ駁論ニ答フ。	帝國文學二ノ四、 國學院雜誌二ノ七
	十一月	上田萬年、國家教育社ニ於テ、言語學上ノ知識ノ缺乏ヨリ生ジタル教育上ノ缺點ヲ論ジ、國語調査會設立ヲ希望スルノ趣旨ヲ演ブ。	
	一月	上田萬年、『國語會議に就きて』ト云フ演說ヲナス。	
	二月	時事新報、電報用假名文字ハ歐文報ノ語數ニ比シテ適ニ便利ナルガ如シトノ報告ヲ爲ス。	二、國語改良異見四〇
	四月	東京帝國大學文科大學内ニ國語研究室ヲ設ク。	
明治三十一年	一月	金澤庄三郎、『國語に就きて思へる事ども』ト題シ、ルイテルノ例ヲ引キテ全國普通ノ言語ヲ定メントコトヲ勸ム。	三、國學院雜誌四ノ三
	一月	神崎一郎、『漢字の現在及將來を論ず』ト題シ、漢字ノ利害ヲ説キ之ヲ制限セメントコトヲ述ブ。	三、國學院雜誌四ノ三
	三月	吉村寅太郎、帝國教育會講談會席上ニ於テ師範學校中學校ニ於テ國語漢文ノ學科目ヲ廢シ國文科ヲ設クベシト演ブ。	

四月五日	三石賤夫、『國字論』ト題シ、漢字ヲ排斥ス。	五、東洋哲學五ノ四、 東京日々新聞
四月	朝比奈知泉、『今後の文字と文章』ト題シ、國語改良ノ必要ヲ論ス。	
五月八日	井上哲次郎、東京學士會院ニ於テ『新國語確定ノ時期』ト題シ、現今ハ其好時期ナルヲ演ブ。	
五月	上田萬年、フローレンツ、小川尙義、金澤庄三郎、藤岡勝二、猪狩幸之助、新村出、八杉貞利、等言語學會ヲ創立ス。	
六月五日	三石賤夫、『國文論』ト題シ、言文一致說ヲ唱道シテ假名遣終止法等細件ニ及ブ。	五、東洋哲學五ノ六、 五ノ九
六月十五日	松井簡治、『吉村寅太郎の中學科の漢文科廢止論を讀む』ト題シ、之ガ批評ヲ試ム。	教育公報二二三、
六月二十七日	大島正健、『漢字と假名』ヲ出版ス。	
六月	ジヤパン、メール、『日本に於ける羅馬字の採用』ト題シ、羅馬字ハ日本語ニ適スルガ故ニ漢字ヲ棄テ、之ヲ採用センコトヲ勸ム。	八、東洋哲學五ノ七、 八
七月五日	三石賤夫、『國字論補遺』ト題シ、文字ノ備フベキ要件ヲ舉ゲテ假名訂正說ニ傾ク。	
七月二十四日	加藤弘之、井上哲次郎、上田萬年、矢田部良吉、嘉納治五郎、田中秀穂、等國字改良會ヲ設立シ其第一回ヲ開會ス。	
八月	岡田正美、帝國文學ニ『日本國字論』ヲ出ス。	九、帝國文學四ノ八、
九月二十日	井上哲次郎、『國字改良論』ト題シ、漢字ノ害ヲ説キ羅馬字ヨリモ更ニ便ナル新國字ヲ發明スベシト述ブ。	十、太陽四ノ十九、二

年	月 日	事 項	掲載書目
明治三十二年	二月	衆議院、國語調査會設置ノ豫算ヲ否決ス。	衆議院速記録
	二月	三矢重松、國學院雜誌ニ「口語の研究」ヲ掲グ、原敬、「漢字減少論」ヲ發行ス。	國學院雜誌五、四、五、六、八、九
	六月	高楠順次郎、「國語改良論に就きて」ト題シ、國字改良方針ニ關スル注意ヲ説ク。	中央公論 十四、六
	十月二十五日	帝國教育會ニ於テ國字改良部ヲ設置センコトヲ議定シ且ツ其規則ヲ定ム。	
	十月二十八日	國字改良部發會式ヲ行ヒ前島密ヲ部長ニ、後藤牧太、小西信八ヲ幹事ニ選定ス。	
	十一月	國字改良會國字改良部ニ合併ス。	
	十二月十二日	「 ^{ローマ字} ローマ字」ニ「 ^{羅馬字} 羅馬字」ヲ以テ國字となすベキ意見」ヲ掲グ。	讀賣新聞
	十二月十七日	中井喜太郎(錦城)、「國字改良意見」ト題シ、漢字ヲ千字ニ節減シ名詞ハ片假名ニテ記シ且文章ヲ言文一致體ニナスベシト説ク。	讀賣新聞
	十二月二十五日	愛櫻、「假字を以て國字となすベキ意見」ト題シ、 ^{ローマ字} ローマ字ノ「羅馬字を以て國字となすベキ意見」ノ説ヲ駁ス。	讀賣新聞
	十二月	神戸新式國字會ヨリ功名録ヲ出版ス。	

年	月 日	事 項	掲載書目
明治三十三年	一月二日	高橋龍雄、「新國字論」ヲ掲グ國字改良ノ必要方法順序等ニツキテ詳論ス。	日本主義 四十、四十一、四十三
	一月五日	三石賤夫、「國字改良部の假名調査を評す」ト題シ、調査ノ大要十餘項ニツキテ批評ス。	東洋哲學七ノ一、
	一月六日	成蹊生、「漢字廢止を唱ふる者は始皇の意氣を要す」ト題シ、漢字不可廢論ヲ述ブ。	中國民報
	一月七日	岩村茂、國字改良ノ急務ナルヲ説キ、其第一着ノ事業トシテ漢字ノ劃ヲ省略シ、國ヲ國、傘ヲ傘、當ヲ當、等トナシ、又株式會社ノ如キハ株會ト略書スベキヲ述ブ。	京都日出新聞
	一月八日	前島密、假名專用説ヲ述ブ。	讀賣新聞
	一月九日	伊呂波生、國字改良論者ノ多クハ單ニ破壞的ナルコト、假名遣モ漢字節減モ共ニ更ニ深ク研究セル後ニ規定スベキコト、本邦人ノ改良法ノ常ニ一足飛ナルコト等ニツキテ論ス。	文藝俱樂部六ノ三
	一月十日	帝國教育會國字改良部役員會ヲ開キ、國字改良請願書ヲ貴衆兩院并ニ内閣諸大臣ニ提出セン事ヲ議決ス。	
	一月十一日	梅澤精一、國字ハ終ニ羅馬字ヲ採用スベキモノナルヲ説ク。	北門新報
	一月十四日	前島密、教育有志者新年宴會席上ニ於テ漢字排斥論ヲ述ベ、上流ノ知識アル人々ヨリ勇氣ヲ以テ斷行セバ下ハ自然ニ率キラル、ニ至ラムト説ク。	
		矢野文雄、同席上ニ於テ支那ニモ假名ハ必要ナレトモ日本ノ假名ニテハ不適當ナリト説ク。	

年	月	日	事	項	掲載書目
	一月	十五日	辻新次、同席上ニテ前二氏ニ答フトテ文字ノ改良ハ老人ニ責メムヨリモ、數十年後ニ日本ノ社會ヲ組織スベキ小學生徒ノ教育法ニ求ムベキコト、及ビ日本ノ假名ノ支那臺灣ニ適スル由ヲ實例ニ徵シテ説ク。		讀實新聞
	一月	十六日	岡倉由三郎、『假字採用説及ビ言文一致』ヲ載ス。		福島新聞
	一月	十七日	福島新聞記者、社説ニ於テ言語ト文章トヲ成ルベク接近セシメ文字ノ劃ト數トヲ減ズベキヲ説ク。		福井新聞
	一月	十七日	織田信博、『新字採用説』ヲ述ブ。		紀伊毎日新聞
	一月	十八日	山形自由新聞、今日ハ文字改良實施時代ニアラズシテ研究時代ナリト説ク。		山形自由新聞
	一月	十九日	新愛知、『所謂國字改良論』ト題シ、國字改良論ハ其歴史的發展ヲ無ミシ、新奇ヲ術フニ出デタル所爲ナリト説ク。		新愛知
	一月	十九日	新日本、國語トシテ英語ヲ採用スベキヲ説ク。		新日本
	一月	二十日	重野安釋、説文爾雅會ニ於テ、漢字ハ實際字數少クシテ意味多クレバ、決シテ廢スベキモノニアラズト説ク。		
	一月	二十二日	黒澤眞明、國字ハ假名ヲ専用スベキコト、文章ハ言文一致、標準語ハ東京ノ中流以上ノ社會語ヲ中心トスベキコトヲ説ク。		福島新聞
	一月	二十六日	辻新次、國字國語國文ノ改良ニ關スル請願書ヲ、内閣、文部省ヲ始メ、其他ノ各省大臣、貴衆兩院議長等ニ提出ス。		

	一月	二十六日	帝國教育會國字改良部ヨリ國字改良請願書ヲ各省大臣及ヒ貴衆兩院ニ提出ス。		
	一月	三十一日	長谷川誠也(天溪)、『言文一致とは何ぞや』ト題シ、言語ヲ寫ス方法如何、言語ヲ排列スル様式如何、言語ノ範圍如何、ノ三疑問ヲ提出ス。		毎日新聞
	二月	五日	井上圓了、哲學館漢文科生徒ニ對シ演述セル『漢字不可廢論』ヲ出版ス。		大阪毎日新聞
	二月	五日	原敬、此日ヨリ漢字減少論補遺ヲ連載ス。		
	二月	六日	根本正外五名ヨリ『國字國語國文ノ改良ニ關スル建議案』ヲ衆議院ニ提出ス。		
	二月	十日	三上參次、假名採用ノ妥當ナルヲ説ク。		
	二月	十日	秦政二郎、國語統一策ヲ説ク。		讀實新聞
	二月	十五日	言語學雜誌第一號出ツ。		國文學十四、十五號
	二月	十五日	根本正外五名ヨリ提出シタル國字國語國文ノ改良ニ關スル建議案、衆議院ニ於テ調査會ヲ設クルコトニ修正可決セラル。		衆議院速記録
	二月	十六日	加藤弘之等、國字國語國文ノ改良ニ關スル建議案ヲ貴族院ニ提出ス。		京都日出新聞
	二月	十九日	大江文城、漢文廢スベカラズト説ク。		二六新報
	二月	十九日	千八ト號スル人二六新報ニ心頭語ト題シテ國語改良ノ意見ヲ述ブ。		
	二月	十九日	帝國教育會々長辻新次提出ノ國字國語國文ノ改良ニ關スル請願貴族院ニ於テ採擇セラル。		
	二月	二十日	島村瀧太郎(抱月)、『言文一致と敬語』ト題シ、言文一致ハ國字改良ノ前途ニ伴フ文體ニシテ、其敬語ハ普通的ナルモノ、工夫カ、獨語的ノ辦法ヲ緩和		

國字國語改良論說年表

年	月日	事	項	掲載書目
	二月二十一日	スルカノ二途ヲ出デザルベシト説ク。 國字國語國文改良ニ關スル建議案、貴族院ニ於テ調査會ヲ設クルコトニ修正シテ可決セラル。		中央公論十五ノ二、 貴族院速記録
	二月二十二日	帝國教育會國字改良部漢字部ニテハ、(一)漢字節減ニ關スル材料ヲ蒐集スル事、(二)固有名詞ハ凡テ漢字ヲ用ケル事、(三)形容詞及ビ動詞ハ成ルベク漢字ヲ用ヒザル事、(四)簡易ニシテ普通定用的ナル漢字ハ之ヲ保存シ置ク事、(例ヘバ郡市町村月日數字圓錢等ノ如シ)ヲ議定ス。		
	二月二十六日	田中秀穂、國字改良意見ヲ掲グ。		讀賣新聞
	三月三日	帝國教育會ニ於テ初メテ言文一致會ヲ開ク。		
	三月三日	田口憲、『國字改良意見』ヲ印刷配布ス。		
	三月五日	井上圓了、『國字改良論の三大誤』ト題シ、國字改良論旨ノ歐人ノ評ニ迷ヘルコト國字ヲ改良セバ習得ノ困難總テ消失スト考フルコト、及ビ單ニ日常ノ便否ノ上ノミヨリ漢字ヲ論ズルコトヲ難ズ。		東洋哲學七ノ三、 太陽六ノ三、 國文學十五號
	三月五日	西村茂樹、『國字改良論』ト題シ、小學教育ニ於テモ漢字ヲ廢スベカラズ、只甚シキ不便アルモノヲ除クニ止メント欲スト説ク。		
	三月十日	内海弘藏、『言文一致の文章に就きて』ト題シ、其得失ヲ言フ。		
	三月十一日	木犀樓主人、『漢字減少論に就て』ト題シ、支那貿易ニ與ルモノハ宜シク支那字ヲ學ハザル可ラズト説ク。		海南新聞

三月十五日	後藤牧太、羅馬字說ヲ唱ヘ、且ツ實行上ニ於テハ漢字節減ヨリ假名ニ移リ、次デ羅馬字ニ進マザル可ラスト説ク。	讀賣新聞
三月十五日	糟粕寒士ト云フ人、『文字改革論に就いて』ト題セル一篇ヲ掲ゲテ、文字改良ヨリモ文體改良ノ急務ナルヲ説ク。	
三月十七日	やまと新聞『漢字制限と中等教科書』ト題シテ、漢文教科書ヲ採用センニハ漢字制限ノ主旨ニ依ルベシト説ク。	
三月二十六日	芳賀矢一、國字改良ノ意見ヲ述ブ。	讀賣新聞
四月一日	田口憲、此日ヨリ國字ハ片假名ヲ採用スベキコト、及ビ國語ニ就キテノ說ヲ連載ス。	毎日新聞
四月二日	文部省、前嶋密外六名ニ國語調査委員ヲ囑託ス、委員長前嶋密、委員文學博士上田萬年、那珂通世、文學博士大槻文彦、三宅雄二郎、徳富猪一郎、湯本武比古。	官報
四月三日	听江逸生、漢字全廢ノ不可ヲ説ク。	中國新聞
四月三日	素卿、此日ヨリ漢字假名併用說ヲ連載ス。	大阪毎日新聞
四月七日	大阪毎日新聞、此日ヨリ『へり假名改革論』ト題シ、字音假名ヲ一定スベキ由ヲ連載ス。	
四月十日	難波常雄、『國文國字改良論者に勸む』ト題シ、理ヲノミ説カンヨリ實行方策ヲ講スベシト説ク。	國文學十六號
四月十三日	文部省、朝比奈知泉、國語調査委員ヲ囑託ス。	官報
四月十五日	東京日々新聞漢字全廢論ヲ掲ク。	東京日々新聞

國字國語改良論說年表

年	月 日	事 項	掲載書目
	四月十六日	文部省ニ於テ第一回國語調査會ヲ開會ス。	
	四月十八日	京都日出新聞、此日ヨリ國語國字ト題シ、羅馬字採用説ヲ連載ス。	京都日出新聞
	四月十八日	報知新聞、『國語調査の先決問題』ト題シ、國語ヲシテ時文ニ接近セシムベシト説ク。	報知新聞
	四月二十六日	山田武太郎、『漢字ノ如キ寫義字ハ強テ棄ツベカラズト説ク。	國民新聞
	四月	岡澤鉦次郎、『國字改良當今の急務』ト題シ、過去ノ文字ヨリ説キ來リテ假名説ヲ主張ス。	帝國文學六ノ四、
	五月一日	島田三郎、『漢學及び儒學』ト題シ、漢語漢文ハ希臘、拉丁ノ言語文章ノ如シト説ク。	太陽六ノ六、
	五月一日	木村鷹太郎、『漢字保存論を駁す』ト題シ、西村茂樹、井上圓了兩人ノ説ヲ駁ス。	日本主義四十六、
	五月十五日	保科孝一、『井上博士著漢字不可廢論を讀む』ト題シ、其各條ニ就キテ細論辯駁ス。	教育時論四五三―五四六、
	五月十九日	市村瓊次郎、帝國教育會ニ於テ『國字改良に關する意見』ト題シ、國語ト國字トノ關係ヨリ立論シ漢字ト雖モ一概ニ排斥スベカラザル所以ヲ辯ズ。	國學院雜誌六ノ
	五月二十日	三矢重松、『時文の統一』ト題シ、言文ノ別ル、所以及ビ其統一策ヲ述ブ。	
	五月二十四日	帝國教育會國字改良部新字部ハ、速記文字ヲ以テ新字トスルコトニ決シ、且ツ新字大體ノ標準ヲ發表ス。(一)日本ノ發音ヲ寫シ得ルコト(二)早く書キ	

	五月二十五日	得ルコト(三)讀ミ易キコト(四)覺エ易キコト(五)大小自在ニ書キ得ルコト(六)印刷ニ便ナルコト(七)タイプライターニ適スルコト(八)字體ノ美ナルコト(九)短縮ヲ記シ得ルコト(十)字體ハ一種ナルベキコト等	
	五月二十六日	帝國教育會假名調査部ニテ、以下ノ諸項ヲ決議ス。 (一)文字ヲ縱行ニ記ス(二)片假名平假名ヲ併用ス(三)假名ノ字形ニ改革ヲ施サズ (四)同音ノ假名ニ數種アルヲ各一種ニ限ル(五)カ、ク、ケ、コ、ヲ廢ス(六)拗音ハ下ノ字ヲ右方ニ寄セテ記ス(七)促聲モ右方ニ寄ス (八)「ほつす」「ラット」ノ如シハ「チ」「ハ」「ヤマ」等ノ「」符ヲ廢ス(九)「メートル」「ヒーター」等ノ「」等ヲ廢シテ「メートル」「ヒーター」ト記シテ引ク音ノ標ニ右ノ傍ニ「」ヲ付ス(十)固有名詞ニハ左方ニ豎線ヲ引ク、常ノ假名ヲ大振リニ書キテ頭字トス、豎線モ頭字モ不用ナリ(以上三說ハ一定セス)(十一)「お、オ」「ひ、ヒ」「え、エ」ヲ廢ス(十二)濁音ノ「ぢ、ヂ」「づ、ヅ」ヲ廢シ「じ、ず」ニテ兼ヌ(十三)從來ノ假名づかひヲ廢シテ一切發音ノ儘ニ寫ス(十四)從來ノ字音假名遣ヲモ廢シテ發音ノ儘ニ寫ス(十五)單語ト單語トノ間ヲ離ス(十六)てにはト助動詞トハ上ノ單語ニ付ケテ記ス(是ハ未決)(十七)句ニ「○」ヲ用キ讀ニ「」ヲ用キルコト(十八)文ハ言文一致ナルベシ(十九)文中ノ用語ニテ成ルベク字音ノ語ヲ避クルコト等	
	五月二十六日	大槻文彦、下谷區教育會ニ於テ、國字改良ニ關スル演説ヲ爲ス。	福島新聞
	五月	黒澤眞明、此日ヨリ『再び國字を論ず』ト題シ、漢字保存論ヲ駁ス。	
	五月	自治館編輯局ヨリ國語改良意見ヲ發兌ス。	

年	月	日	事	項	掲載書目
	六月		保科孝一、「國語問題に就きて」ト題シ國語ノ實際問題ニ關スル所見ヲ述ブ。林茂淳、「新國字に付て」ト題シ、速記字ノ採用ヲ望ムト説ク。		教育界第一卷ノ二號 教育公報二三六、
	六月		阿保新一郎、「國字國語國文の改良に附きて意見を述べ」ト題シ、世人ノ假名ニ練熟スルヲ待チテ需要ニ應ジ調進セバ假名文ノ時代ハ二三十年ニシテ來ルベシト説ク。		教育公報二三六、
	七月	一日	井上圓了、「漢學存廢問題に就て」ト題シ、我邦ノ制度文物ヨリ百般ノコトニ至ルマデ、漢字漢文ヲ待タザレバ知ル能ハズ故ニ漢字廢スベカラズト説ク。(未完)		太陽六ノ九、
	七月	一日	市村瓊次郎、「國字改良の先決問題」ト題シ、假名羅馬字漢字新字ノ是非ヲ定メントセバ先ヅ音字義字ノ利害得失ヲ知ラザルベカラズト論テ、日本ノ現在及ビ將來ニ於テハ義字ト音字トヲ混用スベシト説ク。		太陽六ノ九、 國文學十九號
	七月	十日	堀江秀雄、漢語ヲ國語に復譯セヨト勸ム。		國學院雜誌六ノ六、
	七月	二十六日	保科孝一、國學院雜誌ニ「國語教育に就て」ト云フ論文ヲ掲ゲ、在來ノ國語教育ノ誤謬ヲ指摘シ之ガ矯正ヲ促ス。		國學院雜誌六ノ六、
	七月	三十一日	市村瓊次郎、「文字と言語との關係」ト題シ、支那ノ義字ヲ棄テザリシハ其國語ニ便ナリシガ故ナリ。日本ハ複音語ナリト雖モ已ニ支那語入リタル今日ニテハ漢字ヲモ全然棄ツベカラズト説ク。		言語學雜誌一ノ六、

七月		巖谷季雄、漢字節減ノ方針ヲ説ク。	教育公報二三七、
八月	二日	自樂ト號スル人、其所謂明盲共通字ノ便ヲ説ク。	日本
八月	二十一日	文部省小學校令ヲ發布シテ、假名ノ字體及ビ字音假名遣ヲ一定シ、又漢字ノ數ヲ限定ス。	官報
八月	二十六日	報知新聞、文部省新定ノ字音假名遣ハ國語ヲ破壞スルモノナリト述ブ。	教育公報二三八、
八月		石川倉次、其發明ニカ、ル明盲共通字ノ組織ヲ説明ス。	日本
九月	三日	自樂生、字音假名ト共ニ國語ノ假名モ聲音的ナラシムベシト説ク。	日本
九月	四日	日本字音假名遣ト、漢字制限トニ對スル某教育家ノ説ヲ掲グ。	日本
九月	十二日	擔翁、文部省ノ漢字制限法ヲ難ス。	日本
九月	十三日	小觀子、國字改良漢字節減ニ對スル文部省ノ態度ノ更ニ周密ナランコトヲ求ムト説ク。	
九月	十六日	佐賀新聞、文部省新定假名遣ノくわトカ、じトカ、ザトブ等ヲ一ニシタルヲ難ズ。	
九月	十六日	言文一致會ハ 一行ク／＼ハ全體ノ文章ヲ殘ラズ言文一致ニスル事 一差當リ次ノ事項ヨリ着手スル事 (イ)普通往復文(ロ)記事論説(ハ)著書譯書(ニ)教科書(ホ)公用文(ヘ)ヲ決議ス 揭示廣告文ノ類	
九月	二十九日	新定假名遣法、及ビ漢字制限法ノ其當ヲ得サルコトヲ説ク。	讀賣新聞

年	月 日	事 項	掲載書目
	十月 四日	帝國教育會國字改良部臨時總會ヲ開キ、字態ハ文部省ト一致セシメ、假名遣ハ委員會調査ニ從フコトニ定ム。	
	十月 十八日	帝國教育會國字改良部臨時幹事會ヲ開キ、文部省制定ノ字音假名遣、及ビ漢字制限ハ多少ノ缺點アリト雖モ、亦教育ノ普及上ニ與フル利益ハ彼ノ缺點ヲ補ウテ餘アルモノナリトシテ之ニ從フコトニ一定ス。	
	十月 二十日	冷熱道人、此日ヨリ文部省制定ノ漢字評ヲ連載ス。	日本
	十月 二十一日	帝國教育會國字改良部臨時總會ニ於テ、十八日幹事會ノ決議ヲ是認ス。	
	十月 二十五日	津田信雄、「實地教授上ヨリ見たる新字音假名遣法と字訓假名遣法との關係」ト題シ、今回ノ新假名遣法ハ規則ニ從フモ、澤柳(政太郎)ノ說ニ從フモ、實際ニ行ハレ得ベキモノニアラズト説ク。	教育時論
	十月 二十九日	紫電ト號セル人、漢字全廢スベシト説ク。	日出國新聞
	十月 三十日	富士ト號セル人、井上博士(圖了)ノ漢字不可廢論ヲ駁ス。	
	十月	前島密、後藤牧太、小西信八、坪井正五郎、等帝國教育會ニ向ヒ言文一致研究會設置ニ關スル建議ヲナス。	
	十月	教育公報オスカル、ゲルストベルガーノ日本新國字ヲ載ス。	教育公報二四〇、 太陽六ノ十三、
	十一月 一日	高津鐵三郎、「國語國文の改良」ト題シ、其急務ナルコト及ビ其方策ヲ論ズ。	
	十一月 五日	文部省ハ文學博士上田萬年、神田乃武、渡部董之介、小西信八、磯田良、文學博士高楠順次郎、湯川寛吉、若野敬三郎、金子銓太郎、文學博士大西	

	十一月 六日	祝、藤岡勝二、等ノ諸氏ノ調査セル羅馬字綴方ヲ發表ス。	官報
	十一月 七日	ジャパン、メー、新定羅馬字綴方ノ得失ヲ論ズ。	
	十一月 七日	東京日々新聞、國語調査會設置ノ急務タルヲ説ク。	
	十一月 十日	ジャパン、ガゼット、新定羅馬字綴方ヲ評シ、shヲs、chヲc、トセシハ日本語ニ於テハトモアレ、外國人ヨリ見バ不合理ニシテ且不便ナリト説ク。	
	十一月 十日	無縁生「羅馬字書方報告を讀む」ト題シ、其ヘボン式ト異ナル點ヲ擧ゲテ其茲ニ出デタル所以ヲ問フ。	國民新聞
	十一月 十三日	謗喜、文部省委員制定ノ羅馬字綴方ト羅馬字會規定ノ綴方トヲ對照シ、其得失ヲ論ズ。	大阪毎日新聞
	十一月 十六日	言文一致會ニ於テ、尾崎紅葉ハ言文一致使用史ヲ演ベ、井口在屋ハ言文一致モ學術上ノ語ハ區別アルベシトテ注意ヲ與ヘ、三矢重松ハ源氏物語、枕草子ニ徴シ言文一致モ美文ニ適スル由ヲ説キ、中井喜太郎ハ人民ノ思想ヲ充分後世ニ傳ヘンニハ言文一致ナラザルベカラズト述べ、井上豊太郎ハ言文一致ニハ言語ヲ撰擇セザルベカラズト論ズ。	
	十一月 二十日	藤岡勝二、ゲルストベルガー、日本新國字ト題シ、其得失ヲ擧ゲテ之ヲ論ズ。	九、言語學雜誌一ノ
	十一月 二十八日	國字改良部幹事會ヲ開キ、「從來ノ羅馬字會ニテ調査セシ書方ヲ多數說トシテ採用スルコト、及ビ文部省羅馬字書方報告ヲ少數說トシテ採用スルコト」トシテ總會ニ呈出センコトヲ議決ス。	

年	月 日	事 項	掲載書目
	十一月	零翁、「言語界小觀」ト題シ、一日モ速ニ標準語ヲ制定スベシト説ク。	中央公論十五ノ十
	十一月	チャムバレーン、松田文部大臣ニ建白シテ、羅馬字綴方調査委員ノ報告ハ、理論ニ馳セテ實用ニ有害ナリト論ズ。	
	十一月	縦横生、「羅馬字の書方に就て」ト題シテ、文部省新定ノ羅馬字綴方ヲ五十音圖ニ從ツテ聲音的ニ據ラズ合理的ニ排列スヘシト説ク。	中央公論十五ノ十一
	十二月三日	紫電、羅馬字ノ洋語ヲ同化スルニ便ナルヲ説ク。	日出國新聞
	十二月九日	萬山青處居士、新羅馬字書方ノc及P f 前ノuニ就キテ難ズル所アリ。	關西日々新聞
	十二月十日	紫電、新羅馬字書方ノ得失是非ヲ指摘評論シ、siニ賛成シtiニ不賛成ヲ稱フ。	日出國新聞
	十二月十五日	高橋龍雄、「新定羅馬字に對する世評を讀む」ト題シ、ヘボン式ノ國民一般ニ認メラレザルニ當ツテ、國民一般ニ語學者ノ理想トスル完全ナル新國字ヲ確定スベキハ必要ナリト説ク。	教育時論五六四、
	十二月十五日	帝國教育會ニ於ケル言文一致會席上ニ於テ、島村瀧太郎ハ言文一致體ニ於ケル文法ト修辭トノ誤謬ヲ指摘シテ終止言ノ沿革ヲ述ベ、白鳥庫吉ハ國語ノ發達ト衰頹トハ國力ノ消長ト相關スルコトヲ支那朝鮮ノ例ニ徵シ、横井時雄ハ獨逸ニ於ケルルイーテルヲ學ビテ論語ヲ言文一致體ニ譯スベシト説ク。又此會ニ於テ年賀狀ノ文體ハ「新年おめでとう」ト「新年おめでとう存じませす」ヲ採用スルコトニ定ム。	

十二月十七日	日本某大學教授ノ説トシテ、中學ニ於ケル漢文科不可廢漢字不可捨論ヲ掲グ。	日本
十二月十八日	日本新聞、新定假名遣延期説ヲ掲グ。	
十二月十九日	文部省ハ國語漢文科ノ名ヲ廢シテ、國語科ト改ムベシトノ議ヲ高等教育會議ニ提出ス。	
十二月二十日	時事新報、國字ト國體トノ關係ヲ叙ベ國字改良ノ急務ナルヲ説ク。	
十二月二十日	フロレンツ、「新定羅馬字書方に就て」ト題シ、其實用的ノモノニアラザルヲ論ズ。	言語學雜誌一ノ
十二月二十日	國字改良部ニ於ケル新羅馬字書方審査委員前島密、小西信八、後藤牧太、小山初太郎、林茂淳、澤田吾一、林鑿臣、平井正俊等ノ諸人合議ノ上、シハシ、チツハti tu、フハhu、ダチツハda di du、ザ行ハジズノ二音ヲ缺クコト、チャチュチョハtya tyuトスルコト、ジャツニジヨ及ビヂャヂニヂョハdya dyuトルコトニ決ス。	
十二月二十一日	默堂、文部省ノ漢字限定及ビ假名遣改訂ニ於ケル專斷疎忽ヲ難ズ。	
十二月	漢字節減、調査委員ヨリ漢字節減調査會ノ決議及其理由ヲ報告ス。	教育公報二四二、
十二月	樋口門之介、其發明セル新國字ヲ示シテ其組織ヲ説明ス。	
一月一日	井口丑二、其平假名字ニ由レル新字ヲ掲グ、其茲ニ到レル所以、書法、及ビ實施ノ方法等ニツキテ詳論ス。	長崎新報

年	月 日	事 項	掲載書目
	一月一日	東海新聞、澁谷愛(馬頭)ノ國語愛國心ニ關スル談話ヲ掲グ。	
	一月一日	八杉貞利(勞舟)、『講談文學と現代語の修養』ト題シ、講談物ノ愛讀セラル、ハ其用語ノ圓熟ナルガ故ナレバ、之ヲ救ハンニハ趣味ノ涵養ト共ニ現代語ノ修養ナカルベカラスト説ク。	新文藝一ノ一、 國文學二十五號
	一月十一日	堀江秀雄、『國語の將來』ト題シ、言文一致ノ必要ヲ説ク。	
	一月二十日	帝國教育會國語改良部總會ニ於テ報告案ヲ可決シ、羅馬字五十音ノ綴方ハ文部省調査報告ト一致セシメントニ定ム。	
	一月二十日	新村出、『羅馬字書方の改正に就て』ト題シテ之ヲ評論シ、併テ帝國教育會ノ羅馬字書方ニ及ブ。	言語學雜誌二ノ
	一月二十日	市村瓊次郎、哲學館同窓會例會席上ニ於テ『中等教育に於ける漢文の價值』ト題シ、種々ナル方面ヨリ漢文ノ必要ヲ論ズ。	一、
	一月二十日	三矢重松、『字音新假名遣に就いて』ト題シ、文部省ノ態度ヲ責ム。	國學院雜誌七ノ
	一月二十六日	神田青年會館ニ於テ、言文一致會第一回公開演說會ヲ開キ、岡部精一、菊池大麓、坪井正五郎、井上豊太郎、井上哲次郎、等出演ス。	
	一月二十七日	福地源一郎、『小學の用字及字音綴字法』ト題シ、文部省ノ獨斷ヲ難ズ。	日出新聞
	二月一日	帝國教育會國字改良部總會ニ於テ、羅馬字書方ノ内、拗音、長母音、鼻聞音附號、及ビ語ノ分別書方等ノ調査ヲ了ス。	
	二月二日	斯文學會ニ於テ、漢文科名廢止反對演說會ヲ開キ、内田周平、細田謙藏、	

	二月三日	谷干城、井上圓了、肝付兼行、等出演ス。 教育學術界ハ其社説ニ於テ、『漢文科ノ教育的價值』ト題シ、一般ニ課スル漢文ハ『國語化セル漢文』ヲ以テスヘシトテ文部省案ヲ贊成ス。	教育學術界二ノ
	二月五日	久米邦武、『國字改良論』ト題シ、漢字全廢論ハ空論タルニ過キス、今ノ國語ニ不足ナルハ營業社會ノ交際上ノ言語中、其運動ヲ詳明スル用語ノ乏シキニアリ、國字改良ノ要點ハ此ニ存スト説ク。	太陽七ノ二、 東洋哲學八ノ二、
	二月五日	井上圓了、『漢學ノ運命』ト題シ、漢學漢字ノ危急ヲ説キテ漢學家ニ警告ス。	
	二月十二日	漢學者團體ヨリ漢文科存置ノ請願ヲ貴衆兩院ニ提出ス。	
	二月十三日	東海新聞、『漢文と國文』ト題シ、國文ノ爲メニ漢文ヲ研究スベシト説ク。	
	二月十三日	言文一致會ヨリ同會設置ノ請願書ヲ貴衆兩院ニ提出ス。	
	二月十四日	讀賣新聞、言文一致會ノ請願書ヲ掲グ。	
	二月十五日	ジヤパン、メール、言文一致及ビ漢文科存置ノ兩請願ニツキテ批評ス。	
	二月十七日	帝國教育會ニ於テ、言文一致會第二回公開演說會ヲ開キ、澁谷愛、前島密、加藤弘之、新渡戸稻造、白鳥庫吉、梅謙次郎、等出演ス。	
	二月十八日	西村茂樹、日本ニ於テ『國家文運の前途』ト題シ、漢字漢學ハ全廢スベカラズト説ク。	
	二月十九日	信濃毎日新聞、言文一致會ノ請願書ヲ批評シ、更ニ口語的ナラザルベカラズト説ク。	時事新報
	二月二十一日	池田常太郎、日本ノ漢文ハ今日ノ支那ニハ實用ナキヲ説ク。	
	二月二十四日	漢學者、日本紙上ニ於テ國語漢文科合併反對意見書ヲ發表シ、漢文漢字ノ	

年	月 日	事 項	掲載書目
	二月二十六日	葉末露子、言文一致ノ得失ヲ述ブ。	米澤新聞
	三月一日	川田鐵彌、『言語の發達を論じて國字改良論に及ぶ』ト題シ、標準語制定ハ現今ノ急務ナル所以ヲ述ベ文部當局者ノ粗略ニシテ方針ノ動キ易キヲ歎ズ。	新文藝一ノ三、
	三月二日	山陰新聞、『國語改良の態度』ト題シ、其慎重ナラサルヘカラサルヲ説ク。	
	三月三日	神津包明、『言文一致の現在及未來』ト題シ、言文一致ノ必要意義及ビ實行方法ニツキテ略叙ス。	教育學術界二ノ五、
	三月四日	湯淺吉郎、文字各種ノ長所ヲ舉ゲ新國字ノ發明ヲ促ス。	京都新聞
	三月五日	神保小虎、『ローマ字變革論』ト題シ、從來ノローマ字書方ニ破壊スベキホドノ罪ナクシテ其破壊ヨリ來ルベキ害ハ大ナリト説ク。	太陽七ノ三、
	三月九日	言文一致會ニ於テ、課題『梅見に人を誘ふ文、悔みの文』ノ文例ヲ公ニス。	
	三月二十一日	言文一致會第四回公開演說會ヲ開キ、高田早苗、保科孝一、及ビ大隈重信出席演說ス。	
	三月二十五日	後藤宙外、文章ヲシテ口語ニ接近セシムベク、又其方法トシテハ立派ナル言文一致文範ヲ出スベシト論ズ。	大阪毎日新聞
	三月二十六日	貴衆兩院ヨリ言文一致會設置ノ建議書ヲ政府ニ送附ス。	
	三月三十日	山田武太郎、國民新聞ニ於テ言文一致會修正ノ『悔みの文』ヲ批判シ其缺點ヲ指摘ス。	國民新聞

三月	四月十五日	高等師範學校尋常小學國語科實施方法要領ヲ發表ス。	
	四月十八日	石川倉次、『う』と『と』との『ん』ト題シ、を『一ニスル』ハ可ナレトモ『う』ト讀マシムルハ不可ナリト説ク。	教育公報二四六、
	四月十八日	社會新報、言文一致會ニ向ッテ敘事談ノ講壇ヲ開カンコトヲ勸ム。	
	五月五日	白鳥庫吉、『言文の一致を要する歴史的原因』ト題シ、其所見ヲ述ブ。	教育學術界三ノ一、
	五月六日	向軍治、『言文一致の文體に就き』ト題シ、山田武太郎ノ説ヲ批評ス。	讀賣新聞
	五月十三日	西村茂樹、學士會院ニ於テ『言文一致を論ず』ト題シ、世人ハ西洋崇拜ノ餘此論ヲナスニアラザルカト演ブ。	
	五月十八日	讀賣新聞、此日ヨリ所々ノ言文一致會ニ於ケル演說筆記ヲ掲ゲ、言文一致ノ實行ヲ促ス。	
	五月十九日	澁谷愛等ノ發起ニテ、千葉言文一致會發會式ヲ梅松別莊ニ開キ、前島密、後藤牧太、岡部精一、三矢重松、中井喜太郎、井上豊太郎、等出演ス。	
	五月二十八日	向陽ト號セル人、『言文一致と歌語』ト題シテ、現行口語ニハ七七七五ノ形ノ適スルヲ説ク。	河北新報
	六月四日	國字改良部總會ニ於テ、漢字節減調查會ノ決議及其理由ノ報告ニ基ツキ、漢字節減ノ標準ヲ議定ス。	
	六月五日	錦孺子、島根縣私立教育會總集會ニテ、候文體ヲ廢シテ言文一致體ヲ用井ソトヲ議決シタルヲ贊シ、今日ハ尙彼岸ニ達スル經驗時代ナレバ個人モ團體モ大ニ言文一致ヲ實習セザルベカラスト説ク。	松江日報
	六月五日	高橋龍雄、『國語假名遣の將來』ト題シ、新定假名遣ニ對スル反對論旨ヲ舉	

年	月 日	事 項	掲載書目
	六月十五日	ゲテ批評シ、改造ノ輕舉急激ニ過ギザランコトヲ要スト説ク。	教育時論五八一—五八三
	六月十五日	松島剛、『羅馬字書き方に就き管見』ト題シテ其所見ヲ述ブ。	教育公報二四八、
	六月二十二日	江尻庸一郎、『一』につきて』ト題シ、其不可ヲ説ク。	民聲新報
	六月三十日	楊柳城、言文一致ノ大成ヲ期センニハ徒ニ空論ニシテ馳スベカラズト述ブ。	東北新聞
	七月一日	東北新聞ニ某ト云フ名ニテ『言文一致と語法』ト題シ、之ガ研究ヲ發表スルモノアリ。	
	七月一日	國字改良部ニ於テ、長音符ヲ草書體ノ新字「フ」ニ改メンコトヲ決ス。	
	七月一日	讀賣新聞、『地方官及視學官會議』ト題シ、菊池文相ハ宜シク本會議ニ於テ言文一致ノ急務ナルヲ説キ其實行方法ヲ諮問スベシト述ブ。	
	七月七日	堺利彦(枯川)、言文一致ハ先ヅ書簡文ヨリ實行スベシト説ク。	福岡日々新聞
	七月十日	藤岡勝二、『言文一致論』ト題シ、言文一致ノ意義ヲ説明シ、其利益ヲ舉ゲ其實行法ニ就キテ説ク。	言語學雜誌二ノ四、 秋田日々新聞
	七月十四日	好紫樓、言文一致普通文(枯川著)ノ批評ヲ掲グ。	教育公報二四九、
	七月十五日	エルンスト、エドワーズ、『言語改良と言文一致』ト題シ、聲音學ノ立脚點ヨリ假名遣及ビ文字ノ改良等ニツキテ論ズ。	
	七月十五日	山田武太郎、言文一致文例第一編ヲ出ス。	
	七月三十一日	佐賀日々新聞、言文一致セシムルニ先チ佐賀縣下ノ方言ヲ訂正セザルベカラズト説ク。	

七月	七月	山形新聞ノ發起ニテ、公德養成及ビ言文一致會ヲ設ク。	
八月二日	八月二日	高田新聞、新潟縣師範學校ニ於ケル前島密ノ言文一致論ニ關スル演說筆記ヲ掲グ。	高田新聞
八月九日	八月九日	花蓮生、言文一致會ニ模範文ヲ公ニセンコトヲ勸ム。	山形新聞
八月十四日	八月十四日	西村文則、言文一致ノ必要ト標準語制定及ビ語典刊行ノ急務ヲ説ク。	いばらき
八月二十三日	八月二十三日	平野秀吉、『言文一致に就て』ト題シ、標準語辭、語法等ヲ速ニ公ニセンコトヲ促ス。	
九月一日	九月一日	今泉鐸次郎、山田毅城、倉島篤次郎、等新潟市ニ言文一致研究會ヲ設ク。	
十月一日	十月一日	言文一致會ニ於テ、言文一致文書方ノ標準ヲ議定ス。	
十月二日	十月二日	帝國教育會國字改良部例會ニ於テ、言文一致文書方ノ標準ヲ一定ス。	教育公報二五二、
十月十五日	十月十五日	赤峯瀨一郎、齋田耕陽ノ批難ヲ辯ズ。	教育時論五九四、
十月十五日	十月十五日	星一、『國字改良の急務』ト題シ、羅馬字ノ利益ト漢字ノ缺點トヲ列擧ス。	
十月二十三日	十月二十三日	田村紫蔭、社會ノコト便利ノミヲ以テ律スベカラズト説キ、言文一致ノ缺點ヲ指摘シ時文ヲ推獎ス。	和歌山實業新聞
十月二十六日	十月二十六日	福地源一郎、此日ヨリ日出國新聞ニ言文一致説ヲ掲ゲ、文ヲ言ニ近カラシメン前ニ、人ハ先ヅ言ヲ文ニ近クンコトヲ注意セザルベカラズト述ブ。	
十月	十月	自由堂ヨリ言文一致普通文のり方ヲ發行ス。	
十一月一日	十一月一日	言文一致會ヨリ『言文一致女子普通文』ヲ發行ス。	
十一月十日	十一月十日	江戸川町言文一致會ヨリ新文第一號ヲ發行ス。	
		言文一致會ヨリ全國各商業學校長へ宛テ、消息文ヲ言文一致體ニセンコト	

年	月 日	事 項	掲載書目
明治三十五年	十一月十五日	鴨脚秀克、『言文一致の現在及將來』ト題シ、言文一致ノ利害、使用文字ノ相互ノ便否、及ビ假名遣ハ歴史的二從ヒ、且思想ヲ發表スル形式ハ言文一致體ニテ其使用文字ハ平假名ヲ用キルベキ理由ヲ論ズ。 越後直江津ニ言文一致會支部ヲ設ク。 足立栗園、『言文一致私見』ト題シ、言文一致論者及反對論者ノ主張、方今ノ時勢ト思想表出法、言文一致論者ノ注意、及ビ其責任等ニツキテ論ズ。 言文一致會第三回公開演說會ヲ帝國教育會講堂ニ開キ、三矢重松、大槻文彦、井口在屋、出演ス。又三矢重松ハ『言文一致ノ前途』、大槻文彦ハ『言文一致ノ標準語』、井口在屋ハ『思想運搬機械を大に修繕すべし』ト題シ、言文一致會ニ於テ言文一致ノ必要ヲ説ク。 三矢重松、言文一致文章案ヲ言文一致會取調委員會へ提出ス。	教育時論五九七、 中央公論十六ノ十一、十二、
	十二月十五日	三矢重松、言文一致文章案ヲ言文一致會取調委員會へ提出ス。	教育公報二五四、
	一月三日	高橋五郎、『國字國語改良論者ノ輕學妄動附漢字存廢の可否』ト題シテ、急進ハ徒ニ蹉跌ヲ招クニ過ギズト論ズ。 峽中日報、靜所生ノ言文一致論ヲ掲グ。 山川健次郎ノ、『中學校漢文全廢論』教育時論ニ出ツ。	教育界一ノ三、 教育時論六〇二、
	一月四日		
	一月五日		

掲載書目

事 項

年

月 日

一月十九日	福地源一郎、『漢字を減少する議』ト題シ、假名會羅馬字會ノ失敗ハ其常用ニ不便ナルコト、漢字交リ文ヨリモ更ニ甚シキモノアリシガ故ナリ、故ニ先ヅ漢字ヲ二万乃至三万ニ限リテ字書ヲ作り、公文書モ之ニ從ヒテ認ムベシト論ズ。 日出國新聞	
二月	國語調査委員會設置ノ豫算、帝國議會ヲ通過ス。	
二月八日	國語調査委員長前嶋密、同委員上田萬年外六名ノ囑託ヲ解ク。(文部省)	
二月九日	日出國新聞、清國問題ヨリシテ漢字廢止ニ反對セル説ヲ駁ス。	
二月十二日	文部省ニ於テ、文學博士坪井九馬三、理學博士神保小虎、箕作元八、野口保興、磯田良、山崎直方ノ五名ニ、外國地名及人名ノ稱へ方書キ方取調委員ヲ命ジ、師範學校、中學校、高等女學校程度ノ地理及歴史教授用外國地名及人名ノ稱へ方及書キ方ヲ取調ベシム。 言文一致會ヨリ言文一致會ノ會誌ヲ發行ス。 國語調査委員會官制發布セラル。 臺灣總督府民政部總務局學務課ニテ國民讀本參照假名遣法ヲ發行ス。 國語調査委員長以下左ノ通り任命セラル。(内閣)	官報
二月二十二日	委員長 男爵文學博士加藤弘之	官報
三月二十四日	委員 嘉納治五郎 文學博士井上哲次郎 澤柳政太郎 文學博士上田萬年	
三月十八日	文學博士三上參次 渡部董之介 文學博士高楠順次郎 文學博士重野安	
四月十一日	委員 德富猪一郎 文學博士木村正辭 文學博士大槻文彦 前嶋密 委員上田萬年、國語調査委員會主事ヲ命セラル。(内閣)	四月十二日官報 同上

年	月 日	事 項	掲載書目
	四月十四日	文部省内ニ國語調査委員會事務所ヲ設ケ始メテ會務ヲ取扱フ。	
	四月十四日	委員上田萬年、委員大槻文彦ノ兩名國語調査委員會主査委員ヲ命セラル。	
	四月十六日	林泰輔、保科孝一、岡田正美、新村出、大矢透ノ五名ニ國語調査委員會補助委員ヲ囑託セラル。(國語調査委員會)	
	四月三十日	文學博士元良勇次郎、文學博士松本亦太郎、文學博士佐藤誠實ノ三名ニ國語調査委員會臨時委員ヲ命セラル。(内閣)	五月一日官報
	四月十七日	足立北鷗、「教へざるに如かず」ト題シ、言文一致會ハ方法ヲ誤レリト劾ベ、言文一致ノ目的ヲ達セントスルニハ、初ヨリ漢字ヲ教ヘザルニ如カズト説キ、漢字保護説ヲ論破ス。	讀賣新聞
	四月十九日	報知新聞、言文一致ハ緊切ナル急務ナリト説キ、之ヲ實行セントセバ先ツ發音ノ教授ヲ嚴密ニ爲スベシト述ブ。	
	四月二十日	言文一致協會ヨリ新紀元第一號ヲ發行ス。	
	四月二十四日	文部省學校衛生主事室ヲ臨時會場トシ、第一回國語調査委員會ヲ開キ、文部大臣理學博士男爵菊池大麓臨場同會ニ對スル希望ヲ演ブ。	
	四月三十日	士陽新聞、言文一致ハ國民ノ膨脹ニ必要ナリト説ク。	士陽新聞
	四月	言文一致會ヨリ全國ノ師範學校長ニ宛テ、言文一致實行法研究ノ勸誘狀ヲ發ス。	
	五月三日	帝國教育會内言文一致會ヨリ言文一致論集ヲ發行ス。	

	五月五日	言文一致會ヨリ新文光第一號ヲ發行ス。	
	五月	言文一致會言文一致體唱歌ノ懸賞募集ヲ爲ス。	
	六月三日	大島正健、「文字上ノ新同盟」ト題シ、羅馬字專用ニ到ル準備トシテ洋字ヲ制限シテ横書シ、和漢洋三體文字混用體ヲ創ムベシト説ク。	教育界一ノ八號
	六月二十六日	角嶺、「言文一致に關する卑見」ト題シ、實用ノ文學ヲ支配スルカハ大ナレトモ、文學ノ實用ヲ支配スルカハ更ニ大ニシテ持續的ナレバ、文語ヲ捨テ、言文一致ヲ撰フベキ理ナシト説ク。	鳥取新聞
	六月二十八日	時事新報、其社説ニ於テ中學教育ノ課目ヨリ漢文ヲ除クベシト説ク。	教育時論六一七、
	六月	大槻文彦、教育時論社員ノ問ニ應ジテ、「國語改良の話」ヲナシタルモノノ五日發行ノ同誌上ニ掲載セラル。	教育時論六一八、
	六月	樋口勘次郎、佛國巴里ヨリ「羅馬字綴を論ず」ト云フ論文ヲ教育時論ニ寄せ、「漢字交リ文先ツ減ビ、假名次ギテ衰へ、羅馬字綴未來ニ發達スベシ」ト冒頭ニ掲ゲテ之ヲ論述セリ。	教育時論六一八、
	七月二日	時事新報、國語調査會ニ對シテ語法ヨリモ先ヅ字形ヲ改良スベシト告グ。	
	七月四日	國語調査委員會ハ、其調査方針ヲ決議公示ス	官報
		一 文字ハ音韻文字ヲ採用スルコトトシ假名羅馬字等ノ得失ヲ調査スルコト	
		二 文章ハ言文一致體ヲ採用スルコトトシ是ニ關スル調査ヲ爲スコト	
		三 國語ノ音韻組織ヲ調査スルコト	
		四 方言ヲ調査シテ標準語ヲ選定スルコト	

年	月 日	事 項	掲載書目
	七月六日	又目下ノ急ニ應ゼンガ爲ニ左ノ事項ヲ調査スルコト 一 漢字節減ニ就キテ 二 現行普通文體ノ整理ニ就キテ 三 書簡文其他日常慣用スル特殊ノ文體ニ就キテ 四 國語假名遣ニ就キテ 五 字音假名遣ニ就キテ 六 外國語ノ寫シ方ニ就キテ 一 學究生ト號スル人、文部省制定ノ字音假名遣ハ非自然的非科學的非實用 的ナリト述ブ。 下平末藏、前記一學究生ノ説ヲ駁ス。 堀江秀雄、國字改良論纂ヲ發行ス。 保科孝一、「國語調査委員會決議事項について」ト題シ、其報告ニ就キテ一 々評論ス。 岡野久胤、「標準語に就て」ト題シ、口語上ニ於ケル東京大阪ノ二大別ハ永 ク繼續スベシト論ズ。 加藤弘之、「國語調査に就きて」ノ談ヲ教育時論ニ掲載ス。 三宅亥四郎、「字體の實驗的研究に就て」ト題シ、歐洲ニ於ケル字體ノ實驗 的研究ノ例ヲ示シテ、我國字上ニモ此種ノ細心ナル實驗ノ行ハレんコトヲ	官報 信濃毎日新聞 信濃毎日新聞 言語學雜誌三ノ 二、 教育時論六二二、
	七月十四日		信濃毎日新聞
	七月二十二日		信濃毎日新聞
	七月		言語學雜誌三ノ 二、
	七月二十五日		教育時論六二二、
	八月十五日		

	九月二日	望ムト述ブ。 東京日々新聞、「文字文章改良の一策」ト題シ、學校内ノ文字ヲ制限シ、且ツ 其文體ヲ改良セントセバ、先ヅ公文及ビ一般ノ用文ニ對シテ同一工夫ヲ施 サルベカラズト説ク。 大槻文彦、「假名と羅馬字との優劣論」ト題シ、熟音ノ便ナルコトヲ速記字 ノ例ニヨリテ立證シ、普通用ニハ假名ヲ採用スベシト説キ、普通用ト學術 用トハ別ナルコト、習慣激變ノ害アルコト、歐米諸國トノ交際上ノ便否、 等ニツキテ羅馬字説ヲ駁ス。 東海新聞、其社説ニ於テ「國文の改良」ト題シ、今ノ言文一致ハ修辭上ノ缺 點多ケレバ文章タル資格ナシ、故ニ國文ノ改良ヲ圖ントナラバ須ラク材料 ヲ巧妙ナル漢文ニ取り、泰西ノ文理及論理ヲ應用スベシト論ズ。 龜山玄明、「國語調査委員會決議事項を評す」ト題シ、我國ハ東西兩洋文明 ノ集合點ナレバ假名、羅馬字、漢字、ノ三種ヲ混用セザルベカラズト説ク。 松影生、文章ハ會話ニ非ラザルヲ以テ言文一致ヲシテ文章ノ資格ヲ有セシ メントナラバ適當ノ修辭ヲ加ヘザルベカラズト説ク。 芳賀矢一、國語調査委員會委員ヲ命ゼラル。(内閣) 帝國教育會國字改良部幹事會ハ言文一致委員會ト諮リテ、第四回全國聯合 教育會ニ提出スベキ議案ヲ協定ス。 湖邊生、此日ヨリ言文及ビ音字一致ニ就キ、之ヲ社會ノ公約上、教育者ノ 權能上、語法文法修辭上ヨリ觀察シ、口語體表音體ノ實施法及ビ其教科書	教育公報二六二、
	九月三日		教育界一ノ十二號
	九月十五日		
	九月五日		東海新聞 官報
	九月二十五日		
	十月二日		
	十月五日		

年	月 日	事 項	掲載書目	
十 月	十月	トノ關係ヲ説ク。	信濃毎日新聞	
		桑原隲藏、教育學術界ニ「漢字に就きて」ト題セル一篇ヲ掲ゲ、漢字漢文ノ教授法ヲ改善スルニ當リ、刻下最緊要ノ事業ハ第一漢字ノ字義、及ビ字畫ヲ正シテ學生ノ漢字ニ對スル智識ヲ確實ニスルト、第二ハ漢字ト漢字トノ結合ニ關スル規則ヲ明ニシテ學生ノ漢文構成ニ關スル智識ヲ正確ニスルトニアリト論ズ。		
		東京諸新聞、増田乙四郎ガ創作新國字ヲ紹介ス。		
		外國地名及人名取調復命書發布セラル。		
		讀賣新聞、「國字改良に就て」ト題シ、國字改良ハ印刷業ニハ別ケテ急務ニシテ、言文一致ノ實行ハ國字改良ニ先タザルベカラスト説ク。		
		讀賣新聞、小森徳之ガ新案ノ自由假名ヲ紹介ス。		
		小森徳之ガ、新案ノ自由假名ノ批評日本ニ出ツ。		
		小森徳之、自由假名ノ批評ニ答フ。		
		下野日々新聞、其社説ニ於テ漢文ハ高渾偉大精酷森嚴峻婉華麗生新活潑ナルモノナレハ廢スベカラスト説ク。		
		彙ニ發表シタル外國地名及人名ノ稱ヘ方書キ方ノ増補訂正、及正誤表公ニセラル。		
		物集高見、「學問の難さ」ト題シ、會話ト記録トハ人稱同ツカラズ、格モ時		官報
		十二月十七日		十二月十七日

年	月 日	事 項	掲載書目	
明 治 三 十 六 年	十二月	十二月十七日	モ語尾ノ趣モ相違ナレバ言文一致ハ到底不可能ノコトナリト説ク。日本、其社説ニ於テ其國語ノ基礎ヲナスコト、簡勁ナルコト、國交上必要ナルコト、及ビ言文ニ使用セラル、コト、等ヨリ漢文學ヲ中學教育ヨリ却クルハ不可ナリト論ズ。	讀賣新聞
		十二月	文部省内ニ開會セル高等教育會議ニ於テ、中學校教科書中漢文ノ目ヲ廢スル建議案ヲ可決ス。	
		一月五日	高橋作衛、漢文獎勵論ヲ教育時論ニ掲ク。	教育時論六三八、
		一月七、八日	足立北鷗、讀賣紙上ニ於テ國力發展上、及ビ普通教育上ヨリ立論シテ高橋作衛氏ノ非漢文廢止論ヲ駁ス。	
		一月十一日	高橋作衛、讀賣紙上ニ於テ北鷗所駁ノ齟齬點ヲ指摘シ、漢文ハ英獨佛語等ト同シク中學程度ニ於テ素養セシムヘキモノナリト論ズ。	
		一月 自十四日 至十六日	飛影ト號スル人、國語調査委員會ノ方針ヲ冷評シ其不可能ヲ説ク。	人民
		一月十五日	高橋龍雄、教育時論に「法學博士高橋作衛君に呈す」ト題シテ、漢文獎勵論ヲ駁ス。	教育時論六三九、
		一月十八日	足立北鷗、高橋作衛ノ辯駁ニ對ヘ、漢文獎勵論ノ如キ流水ニ逆行セル議論ニハ反對セサル可カラスト論ズ。	讀賣新聞
		一月十九日	鍾禮菴ト號スル人、活版及ビ謄寫ノ便ヨリ論ヲ、既往ノ保有ヨリモ寧ロ將來ノ進運ニ重キヲ置キ、國字トシテ羅馬字ヲ採用セザル可ラズト説ク。	秋田魁新聞
		一月二十一日	萬朝報ハ、其紙上ニ於テ漢文ノ如キハ一部ノ人ニ委シテ之ヲ普通教育ヨリ	

年	月	日	事	項	掲載書目
	一月	二十四日	除去スベシト説ク。		
	一月	二十五日	青柳篤恒、支那時文ノ性質ヲ叙シ其研究ノ必要ヲ論ス。 時事新報、漢文科ニ時文ヲ加ヘタリトモ實用上ノ效能ニ至リテハ極メテ微々タルモノニシテ、却テ屋上屋ヲ重ヌルニ過ギザレバ一日モ早ク漢文ヲ全廢ス可シト説ク。		東京朝日新聞
	三月	十日	堀江秀雄、國文學紙上ニ於テ教科書國定ノ事ハ普通文體ニ關スル標準ヲ廣ク公示スルノ好機ナレバ、此時ニ當リテ國文國語ノ諸學者ハ大ニ起タザル可ラズト説ク。		國文學五十二號
	三月	十一日	田岡佐代治(嶺雲)、西隣ノ大帝國ハ我國力ヲ發展セシム可キ好舞臺ナレバ、其必要上中等教育ニ於テ歐米ノ語學時間ヲ減ズルトモ、寧ロ支那時文ト支那語トヲ課セザル可ラズト説ク。		いはらき
	三月	十五日	旭東ト號スル人、其弟妹ヨリ得タル實驗ヨリシテ言文一致ノ必要ヲ説ク。 干河岸貫一(櫻所)、漢學漢文ヲ嫌フノ風尙ハ漢學ヲ知ラザルト、歐學崇拜ヨリ起ル雷同トニヨリテ形成セラルト説キ、漢字ノ覺エ難キノ説、及ビ、其老衰國ノ學ナルガ故ニ研究スルン必要ナシトノ説ヲ駁シ、中學教課トシテハ其得處英語等ト異ナルナシト論ズ。		若越新聞
	四月	三日	中央新聞ハルドウヒ、リースガ、獨逸某雜誌ニ於テ、日本ハ從來耳ヨリモ目ニ重キヲ置キシコト、歐米文明ノ輸入ト共ニ文字ノ便否ニ注意スルニ		日出國新聞

六月	十一月	十一日	至リシコト、現今ノ狀態ニテハ俄ニ漢文ヲ全廢ス可ラザルコト、然レトモ今ヤ漸ク改良ノ緒ニ就キツ、アルコトヲ述ベ、若シ改良セラレタル曉ニハ、日本人ノ智能的進歩非常ナラント説キタルヲ記載ス。		
六月	四月	十日	横濱新報ハ、上田萬年ノ横濱市教育會總集會ニ於テ、日本語ノ性質ヲ説キ、其短所及長所ヲ歴史ノ事實ニ徴シテ指摘シ、支那語トノ接觸ヨリ國語音韻組織ニ及ボセル結果ヲ言海ニヨリテ數ヘ、横濱ノ如キ門戸ノ地ニアル教育家ハ特ニ是等ノ諸點ニ注意セザル可ラザル所以ヲ論シタル講演摘要ヲ掲グ。		
五月	八月	八日	堀江秀雄、國文學紙上ニ於テ國語調査事業ノ要素ハ制度ヲ完備スルコト、財政ヲ豊ニスルコト、適當ナル委員ヲ任用スルコト、等ノ三者ニアリトシ國語調査會ニ關スル所感及ビ企望ヲ述フ。		國文學五十三號
六月	二月	二十三日	金澤庄三郎、國語調査委員會委員ヲ命ゼラレ、國語調査委員會委員前島密願ニ依テ委員ヲ解カレ、又同委員芳賀矢一ハ同會主査委員ヲ命ゼラル。		官報
六月			日出國新聞ハ、文部省ガ先ツ漢字ヲ節減シ漸ク全廢セントスル方針ヲ讚シ、各官省モ此舉ヲ賛助シ公文等ニモ注意ヲ拂ハザル可ラズト説ク。		
七月	四月	四日	松嶺ト號スル人、三十日ヨリ七月二日ニ亘リテ書讀兩面ヨリ言文一致ノ長所ヲ擧ゲ、又一朝言文一致トナラバ文ヨリ言ニ及ボス利益大ナラント述ベ、言文一致ハ少クトモ普通文トシテ極メテ必要ナリト説ク。		鳥取新報
七月	十三日	十三日	徳島毎日新聞ハ、其雜報欄ニ於テ國語ト國是トノ關係ヲ説キ、國語ヲ統一セザル可カラズト論ズ。		
七月	十三日	十三日	時事新報ハ、其社説ニ於テ固有名詞ニ洋字ヲ當ツルヨリ起ル徒勞ヲ例示シ、		

年	月 日	事 項	掲載書目
	八月十九日	教科書ニハ之ヲ廢ス可シト説ク。 明治三十五年四月創立當時ヨリ三十六年七月ニ至ル、國語調査委員會ニ於ケル議案及ビ審議ノ事項並ニ參考資料等ヲ發表ス。	官報六〇四〇號
	八月二十五日	讀賣新聞ハ、教育ト方言ト題シ、教科書ニ方言ハナキモ之ヲ解クニ其方言ヲ用キルヲ以テ、其勢力ハ依然トシテ減スルコトナシ、故ニ先ヅ普通ノ支那文字ヲ以テ書キ得ル言葉ノ外ハ用キザルヤウニ注意セザル可カラズト説ク。	
	九月 四日	金子喜一、學者ノ文章ト題シ、漢文くづしノ非組織的ナルヨリ著述ニ及ボス影響、及ビ言文一致ノ組織的ナルコトヲ説キ、古典的文ハ之ヲ中等教育ヨリ排除ス可シト述ブ。	萬朝報
	九月十六日	國語調査委員會ニ於テ、國語調査資料蒐集ノ爲メ「音韻并ニ口語法取調ニ關スル事項」ヲ印刷シテ之ヲ各府縣ニ配布シ、其調査報告方ヲ依頼シタリ。	官報
	十一月三十日	高等教育會議議員正木直彦外二名ヨリ、文部省ニ於テ開會セル第八回高等教育會議ニ、「高等小學校ノ國語中ニ於テ「ローマ」字ヲ教授スルコトヲ得ルノ途ヲ開カレンコトヲ望ム」トイフ建議案ヲ提出シタルモ、否決セラル。	
	十二月五日	鈴木大拙、東洋哲學ニ於漢テ字廢止論者ニシテ、往々譯語ニ支那難語新熟字ヲ借用又ハ創製スルヲ難ズ。	東洋哲學 十ノ十二、同日官報
	十二月二十六日	外國地名及人名ノ稱ヘ方書キ方ニ關スル報告ノ増補訂正出ツ。	
	十二月 二十八日	石川辰之助、「加藤博士ニ質ス」ト題シ、國語調査委員會ノ文部省規定假名	

國字國語改良論說年表 畢

		遣ニ對スル優柔ヲ責メ長音符ニ關スル所見ヲ述ブ。	讀賣新聞
--	--	-------------------------	------

明治三十七年三月卅一日印刷

明治三十七年四月一日發行

文部省內

國語調查委員會

東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷者 白土幸力

東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所 三光堂

正 誤 表

頁、行		頁、行	
五ノ一三	かなの會へかなのともノ誤。	全 一 八	掲載書目欄福島新聞ノ四字ハ次行ニ入ルベシ。
八ノ九	月日欄十二月、二日ノ二日ヲ削ル。	三 八ノ二 三	巖岩季雄ハ巖谷季雄ノ誤。
九ノ一八	<small>みい</small> かなのしんぶんノヲ削ル。	全 一 五	掲載書目欄國學院雜誌六ノ六ハ六ノ七ノ誤。
一九ノ一六	ノ題シハト題シノ誤又次行發達ノ下、セヲ脱ス	四〇ノ二 二	全上ニ松江山陰新聞ノ五字ヲ脱ス。
二一ノ一五	掲載書目欄國文學ノ下、二ノ一ヨリ九マテノ八	四一ノ一 六	ゲルストベルガーノ下ニ氏ノノ二字ヲ脱ス。
二二ノ七	字ヲ脱ス。	四三ノ二 三	ルコトニハスルコトニノ誤。
二六ノ一〇	課定ハ課程ノ誤。	全 一 四	掲載書目欄ニ日本ノ二字ヲ脱ス。
二八ノ五	掲載書目欄早稻田文學、七一ハ九一ノ誤。	全 一 五	漢字節減調査委員ノ上、帝國教育會ノ五字ヲ脱
三五ノ一四	演説ヲナスハ論説ヲ出スノ誤。又全行掲載書目	四五ノ一 五	ス。
全 一 九	欄ニ教育時論ノ四字ヲ脱ス。	四八ノ七	日本ノ下、紙上ノ二字ヲ脱ス。
三七ノ二	日新聞ノ六字ヲ脱ス。	四九ノ七	新字「フ」「ハ」「」ノ誤。
全 一 三	朝比奈知泉ノ下、ニノ字ヲ脱ス。	五五ノ一 三	掲載書目欄ニ新潟新聞ノ四字ヲ脱ス。
	短縮ヲハ短縮ニノ誤。	六〇ノ一 五	掲載書目欄ニ教育公報二六三ノ七字ヲ脱ス。
	「し、す」「は、じ、ず」ノ誤。		於漢テ字廢止論者ハ於テ漢字廢止論者ノ誤。